西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

外原（とばる）遺跡群

県営一般農道整備事業（三財原西部地区）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

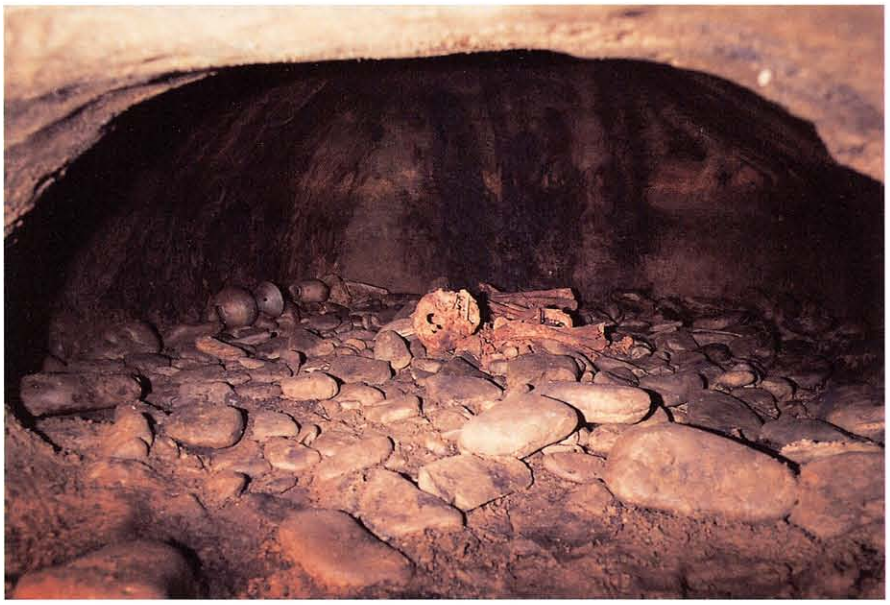
宮崎県西都市教育委員会

①常心塚古墳北側より
調査区全景

②常心塚古墳
外周溝検出状況

①常心原 5 号地下式横穴墓
人骨出土状況

②常心原 6 号地下式横穴墓
玄室内集骨状況



③　同　　上

序

古く、日向国の中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、農業基盤整備事業や、各種の開発事業によって影響を受ける遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成14年度県営一般農道整備事業（三財原西部地区）に伴い、西都市大字上三財所在の外原遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査をまとめたものであります。

今回の調査では、国指定史跡常心塚古墳の周堤外側に周溝を検出したほか、古墳時代後期の地下式横穴墓群や、土壙墓を検出することができました。その成果として、常心塚古墳の形状や正確な規模、造営時期に関する情報や地下式横穴墓造営当時の埋葬方法の一端、人骨資料といった情報が新たに発見蓄積されました。

今回の調査により得られた成果は、日向国または西都市の古代史解明のためには極めて重要なものであります。

本報告書が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導いただいた先生方、宮崎県教育庁文化課、ご協力いただいた宮崎県児湯農林振興局をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成15年３月29日

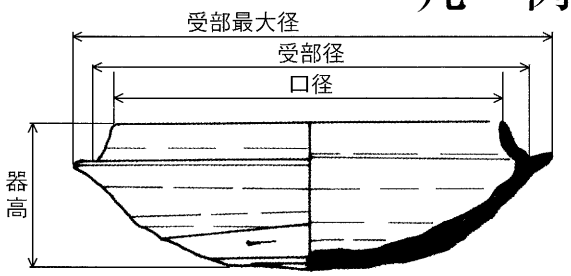
西都市教育委員会

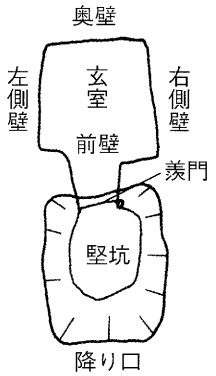
教育長　黒　木　康　郎

例　言

1．本書は、西都市教育委員会が宮崎県児湯農林振興局の委託を請け、平成14年度実施した外原遺跡群発掘調査報告書である。
2．平成14年度の調査は、西都市大字上三財に所在する外原遺跡群内の農道整備予定８路線を対象に試掘調査と本調査を行った。
3．調査は、平成14年４月22日から平成14年12月12日まで行った。
4．発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
5．調査は、津曲大祐が担当し、地下式横穴墓出土の人骨については現地調査、整理を鹿児島大学歯学部　竹中正巳氏に依頼した。
6．調査及び図面作成は、津曲の他、上田龍児、木室友希、長直信（以上福岡大学大学院生）が行い発掘調査者全員で補助した。
7．遺物の実測は津曲、今塩屋毅行（宮崎県埋蔵文化財センター）が行った。遺構、遺物の浄書は津曲が行った。
8．本書の執筆・編集は津曲が行い、第Ⅳ章とFig13は竹中正巳氏に執筆を依頼した。
9．本書に使用した方位は、磁北を用いた。
10．本書に使用した標高は、海抜絶対高である。
11．報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。
12．外原遺跡群という名称は、西都市大字上三財小豆野原に所在する遺跡を総称したものである。
13．本書に用いた写真は、津曲が撮影し、鉄器は今塩屋が撮影した。空中写真については、㈱スカイサーベイに委託した。

凡　例





① ケズリとナデの境は実線
② ナデは破線
③ ケズリの回転方向は、砂粒で表す。

目　次

第Ⅰ章　序説……4
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査の体制……4
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境……6
第Ⅲ章　外原遺跡群の調査……8
　第１節　これまでの調査結果と概要…8
　第２節　調査区の設定と概要……8
　第３節　遺構と遺物……8
第Ⅳ章　地下式横穴墓出土の人骨……25
第Ⅴ章　まとめ……39
報告書抄録……52

挿図目次

Fig. 1 外原遺跡群の位置 s＝1/25,000
Fig. 2 調査区全体図 s＝1/10,000
Fig. 3 8号支線遺構配置図 s＝1/1000
Fig. 4 5号地下式横穴墓土層断面図 s＝1/40
Fig. 5 5号地下式横穴墓閉塞施設 s＝1/40
Fig. 6 5号地下式横穴墓 s＝1/40
Fig. 7 5号地下式横穴墓出土遺物
Fig. 8 5号地下式横穴墓遺物出土状況 s＝1/20
Fig. 9 6号地下式横穴墓竪坑土層断面図s=1/40
Fig.10 6号地下式閉塞施設 s＝1/40
Fig.11 6号地下式横穴墓 s＝1/40
Fig.12 6号地下式横穴墓遺物出土状況 s＝1/20
Fig.13 6号地下式横穴墓集骨状況 s＝1/10
Fig.14 6号地下式出土遺物
Fig.15 土壙墓 s＝1/40
Fig.16 9号支線遺構配置図 s＝1/2000
Fig.17 常心塚古墳墳丘測量図 s＝1/300
常心塚古墳墳丘断面図 s＝1/300
Fig.18 常心塚古墳外周溝土層断面図 s＝1/20
Fig.19 常心塚古墳外周溝出土遺物 s＝1/4
第Ⅳ章
Fig. 1 常心原6号地下式横穴墓1号人骨（女性･若年）の遺存部位
Fig. 2 2号人骨（女性･壮年）遺存部位
Fig. 3 3号人骨（男性･壮年）遺存部位

図版目次

巻頭1 ①常心塚古墳北側より調査区全景
②常心塚古墳外周溝検出状況
巻頭2 ①常心原5号地下式横穴墓人骨出土状況
②常心原6号地下式横穴墓玄室内集骨状況
③ 同 上
PL. 1 ①常心塚古墳北側より調査区全景
②8号支線（真上から）
PL. 2 ①常心原5号地下式横穴墓玄室内人骨
②5号地下式竪坑土層断面 ③5号地下式閉塞石
④5号地下式閉塞状況 ⑤5号地下式5層下面
PL. 3 ①5号地下式1号人骨 ②1号人骨副葬直刀
③1号人骨副葬鉄鏃 ④5号地下式2号人骨
⑤2号人骨副葬刀子 ⑥須恵器副葬状況
⑦5号地下式羨門掘削層と基本土層
⑧5号地下式竪坑降り口側
PL. 4 ①6号地下式玄室内集骨状況
②6号地下式竪坑土層断面
③6号地下式3層上面 ④閉塞施設
⑤閉塞施設（西から） ⑥4層上面検出状況
PL. 5 ①5層上面検出状況 ②5層下面検出状況
③閉塞面と5層下面 ④竪坑掘削痕
⑤竪坑掘削痕 ⑥集骨状況（羨門から）
⑦1号集骨、2号集骨 ⑧3号集骨（手前）
PL. 6 ①6号地下式遺物出土状況 ②鉄器出土状況
③耳環出土状況 ④前壁右隅推定頭位
⑤6号地下式玄室天井（羨門から）
⑥6号地下式羨門掘削と基本土層
⑦6号地下式降り口側
PL. 7 ①常心塚古墳（真上から） ②常心塚古墳外周溝検出状況 ③外周溝土層断面 ④1号土壙墓 ⑤2号土壙墓 ⑥3号土壙墓
⑦4号土壙墓
PL. 8 5号地下式・6号地下式出土遺物
PL. 9 5号地下式・6号地下式出土鉄器
第Ⅳ章 図 版
PL. 1 常心原5号地下式横穴墓1号人骨（女性･熟年）
PL. 2 5号地下式横穴墓1号人骨の左眼窩下縁に付着の植物質
PL. 3 常心原5号地下式横穴墓2号人骨（男性･壮年）
PL. 4 ①常心原6号地下式横穴墓1号人骨
②常心原6号地下式横穴墓2号人骨
PL. 5 ①常心原6号地下式横穴墓3号人骨

表目次

Tab. 1 脳頭蓋計測値（mm）及び示数
Tab. 2 顔面頭蓋計測値（mm）及び示数
Tab. 3 顔面平坦度計測値（mm）及び示数
Tab. 4 頭蓋形態小変異の出現状況
Tab. 5 上腕骨計測値（mm）及び示数
Tab. 6 橈骨計測値（mm）及び示数
Tab. 7 尺骨計測値（mm）及び示数
Tab. 8 大腿骨計測値（mm）及び示数
Tab. 9 脛骨計測値（mm）及び示数
Tab.10 腓骨計測値（mm）及び示数
Tab.11 鎖骨計測値（mm）及び示数
Tab.12 身長（cm）
Tab.13 四肢骨の最大長比と周径比（%）

第Ⅰ章　序　説

第１節. 調査に至る経緯

外原遺跡群の発掘調査については、県営一般農道整備事業に伴い実施したものであり、平成12年度からの継続事業である。内容は、現在簡易舗装で使用されている農道をアスファルト舗装する工事で、地下遺構に影響を与えるため事業主である児湯農林振興局と協議した結果、現状保存が困難であると判断し試掘調査、本調査を実施した。

平成12年度、13年度は工事予定路線を事前に試掘調査し、遺構・遺物が検出されなかったため本調査は実施しなかったが、平成14年度の工事路線は国指定史跡常心塚古墳や常心原地下式横穴墓群が近接して所在するため、本調査と試掘調査を行った。

本調査は、常心塚古墳と常心原地下式横穴墓群周辺の路線を中心に行い、台地北側の路線は試掘調査を行った。

第２節　調査の体制

事業主体　　宮崎県児湯農林振興局　農地整備課　農地整備係
三財原土地改良区

調査主体　　教　育　長　　菊　地　彬　文（前任）　黒　木　康　郎（現任）
文化課長　　阿　万　定　治
同　補　佐　　奥　野　拓　美
同　係　長　　蓑　方　政　幾
同　主　事　　鹿　嶋　修　一
同　主　事　　筌　瀬　明　宏

調査担当　　文化課主事補　　津　曲　大　祐

調査指導　　日　高　正　晴（西都原古墳研究所長）　柳　沢　一　男（宮崎大学教授）
松　林　豊　樹（宮崎県教育庁文化課）　竹　井　真知子（宮崎県教育庁文化課）

発掘作業　　緒方タケ子、廻田　　勉、廻田　和子、黒木トシ子、椎葉　重満、椎葉智佐子、疋田はる子

調査協力　　竹中　正巳（鹿児島大学歯学部）　今塩屋毅行（宮崎県埋蔵文化財センター）
上田　龍児、木室　友希、長　　直信（以上、福岡大学大学院生）

整理作業　　杉田　英子、中原　明美、長谷川明美

来訪者　　塚本　敏夫（元興寺文化財研究所）、有馬　義人、樋渡将太郎（新富町教育委員会）

以上の方々に貴重なご助言ご指導を賜った。（敬称略）

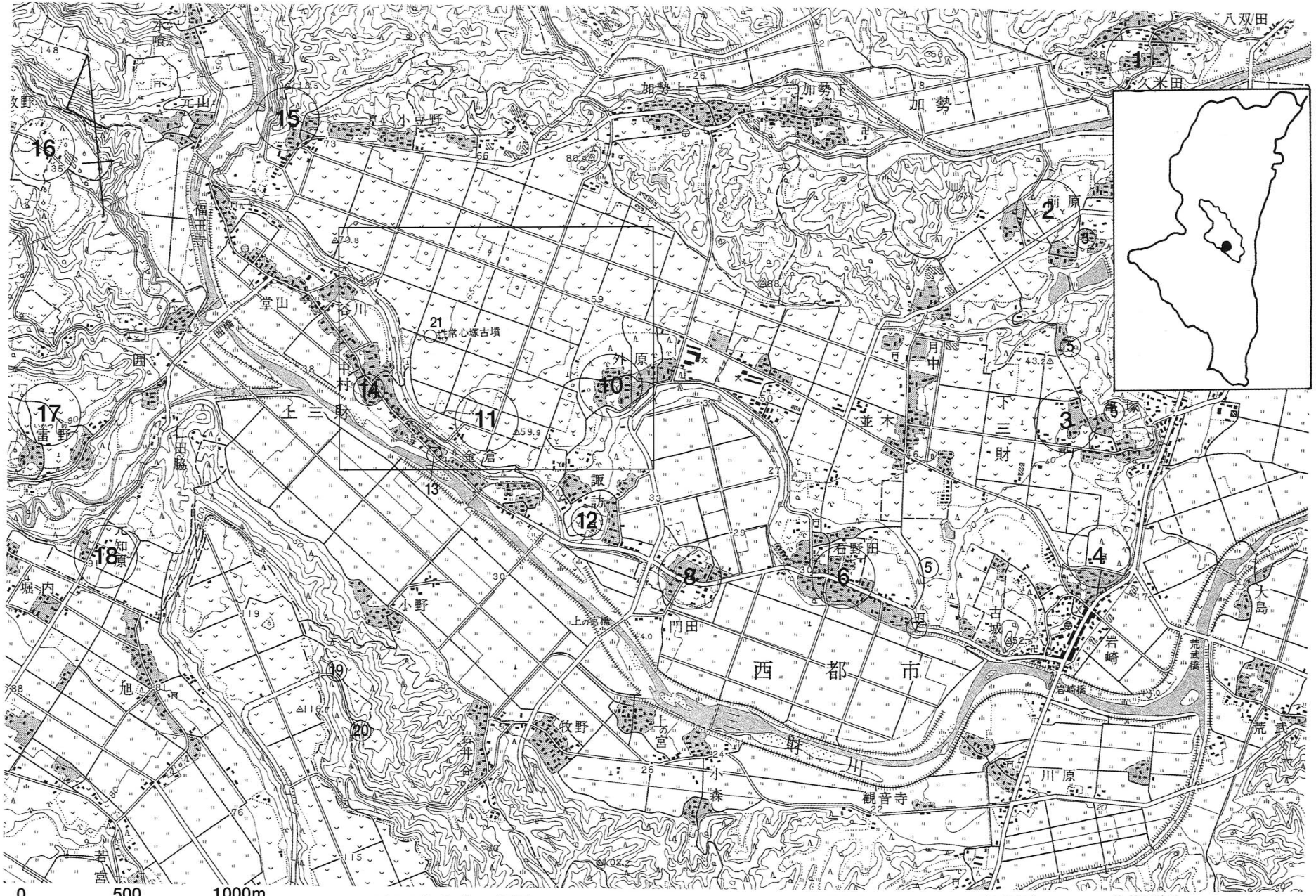


Fig.1　外原遺跡群の位置
S＝1/25,000

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

1．立地

外原遺跡群は、宮崎県西都市の南西部に位置し、九州山地から東に伸びる丘陵上に形成された小豆野原台地の南側を中心に立地する。この台地は南北に約1.3km、東西2.0kmの規模で広がり、台地上には古墳群をはじめとした多数の遺跡が所在する。台地の南側に位置する三財平野には、九州山地を水源とする一ツ瀬川支流の三財川が流れ、都於郡台地の麓で流路を北に変え、三納川と一ツ瀬川合流する。

西都地域にはこのように、台地上に遺跡が立地することが多く、この台地より北東約８kmには特別史跡西都原古墳群が所在する西都原台地、三財平野を挟んで南方約２kmには小豆野原台地と平行して西都市と国富町の境を東に伸びる台地が広がり、元地原地下式横穴墓群をはじめとした遺跡群がある。

2．歴史的環境

古墳時代～古代にかけて日向国の中心地であった西都市街地からは離れて立地するが、小豆野台地が広がる三財地区にも台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。主要な遺跡を概観すると、まず台地東端付近の下三財地区を中心に広がる県指定史跡・三財古墳群がある。過去に発掘調査が行われていないため、造営時期などは不明だが前方後円墳７基、円墳15基が現存しており、５号墳は前方部が低平ないわゆる柄鏡式の前方後円墳である。周辺には前原地下式横穴墓群、月中地下式横穴墓群が所在する。前原地下式横穴墓群は過去に２基が調査され、２号は出土遺物から６世紀末～７世紀初頭に想定する。月中地下式横穴墓群は過去に２基が調査されたがともに土器の出土がなく、１号は玄室平面形が妻入り長方形有屍床タイプで築造年代は５世紀後半代が推定できる。

台地西側に位置する上三財地区には、今回の調査地である外原遺跡群がある。外原遺跡群という名称は小豆野原台地上に所在する遺跡群を、今回の調査にあたって便宜的にまとめたもので、遺跡ごとに個々の名称がある。後述する、国指定史跡で墳丘の周囲に外堤を廻らす方墳・常心塚古墳、６基の地下式横穴墓が発見された常心原地下式横穴墓群など、台地南側を中心に遺物散布地が広がり、他に過去調査された例では北水戸地下式横穴墓群がある。１基が調査されており、６世紀後半の築造で平入り長方形有屍床タイプの玄室平面形を呈す。金倉地区には円墳が２基所在し、地下式横穴墓とともに周辺にさらに消失墳が存在することが予想される。南西側丘陵部には現状で６基が確認されている大高野横穴墓群があり、周辺の地下式横穴墓群や常心塚古墳との関連が興味深いが、調査が行われていないため不明である。

小豆野原台地から三財平野を挟んで南側に位置する台地には、元地原地下式横穴墓群がある。過去に７基の地下式横穴墓が発掘調査された。この中で須恵器を玄室内に副葬していたのは１号墳のみで、蓋杯はTK43型式の特徴を持ち玄室平面形は平入り方形を呈す。その他の６基は妻入長方形や縦長楕円形を呈し右片袖のものが多く、特に５号地下式横穴墓は妻入り長方形有屍床タイプで発掘された中では最も古い玄室形態を持ち、立石により屍床を設けていた。

このように小豆野原台地周辺の古墳時代を中心とした遺跡を概観したが、特に地下式横穴墓の調査例が多くを占め、同時代集落の事例が周辺において報告されていない。今回の調査で常心原地下式横穴墓群と当台地の古墳時代終末期における首長墓である常心塚古墳の一端が資料化されたのは、古墳時代後期～終末期の台地上での様相を解明する上で、重要な情報が蓄積されたことになる。今後、空間的な遺跡の広がりとともに、常心塚古墳や横穴墓群と地下式横穴墓群の関係などが当地域を調査する上で１つの課題となっていくであろう。

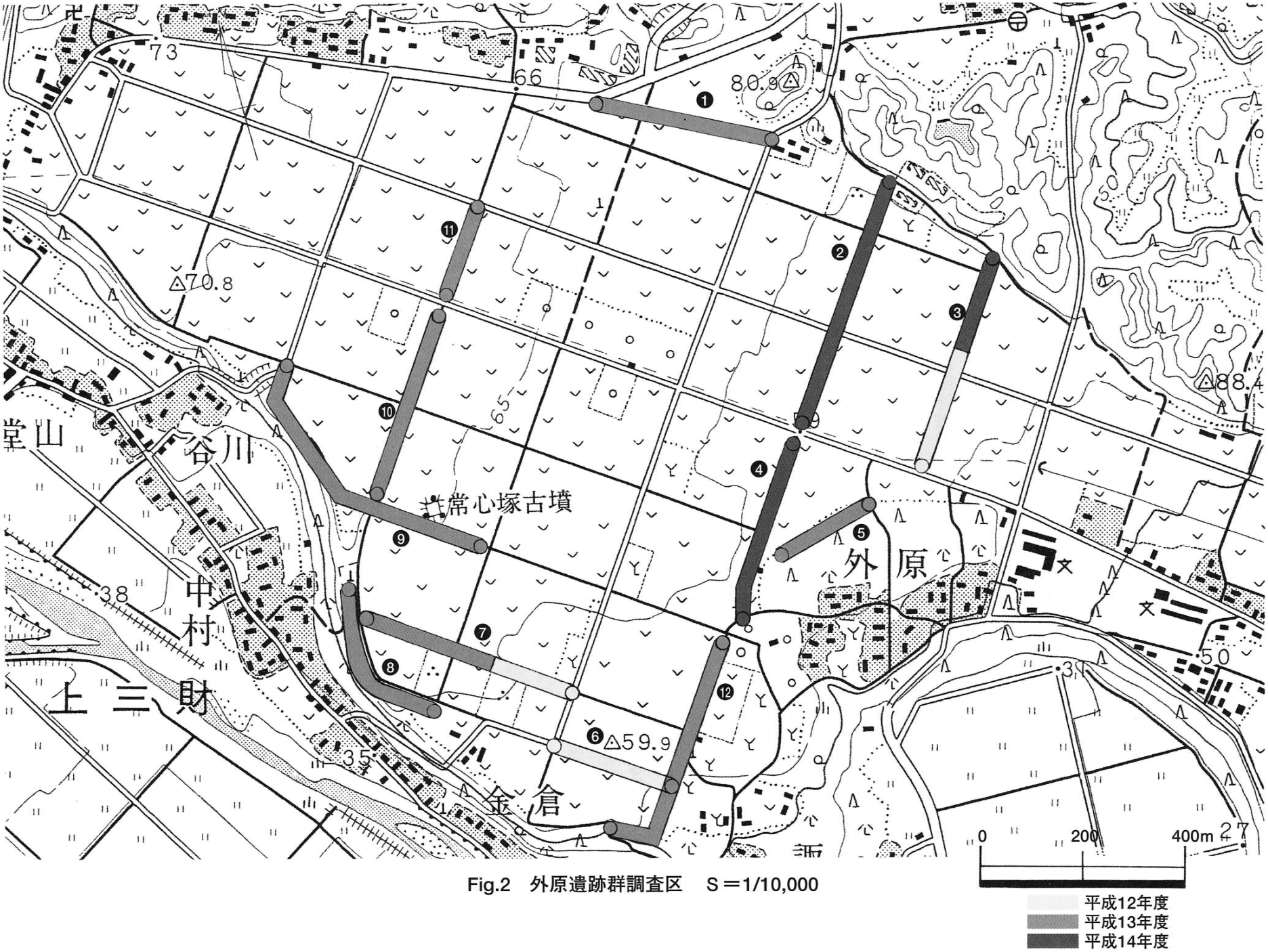


Fig.2　外原遺跡群調査区　S＝1/10,000

第Ⅲ章　外原遺跡群の調査

第１節　これまでの調査結果と概要

外原遺跡群の調査は、県営一般農道整備事業（三財原西部地区）に伴い実施されたもので、平成12年度からの継続事業である。当事業計画は西都市大字上三財の小豆野原台地上に広がり、合計12路線が舗装工事された（Fig. 2）。平成12年度は２号支線、４号支線、３号支線の半分を試掘調査し、遺構が確認されなかったため、本発掘調査は行わなかった。平成13年度は３号支線、６号支線、７号支線の一部をトレンチ発掘による試掘調査を実施したが、アカホヤ層が良好に遺存することが確認されただけで遺構・遺物は検出されなかった。

第２節　平成14年度調査区の設定と概要

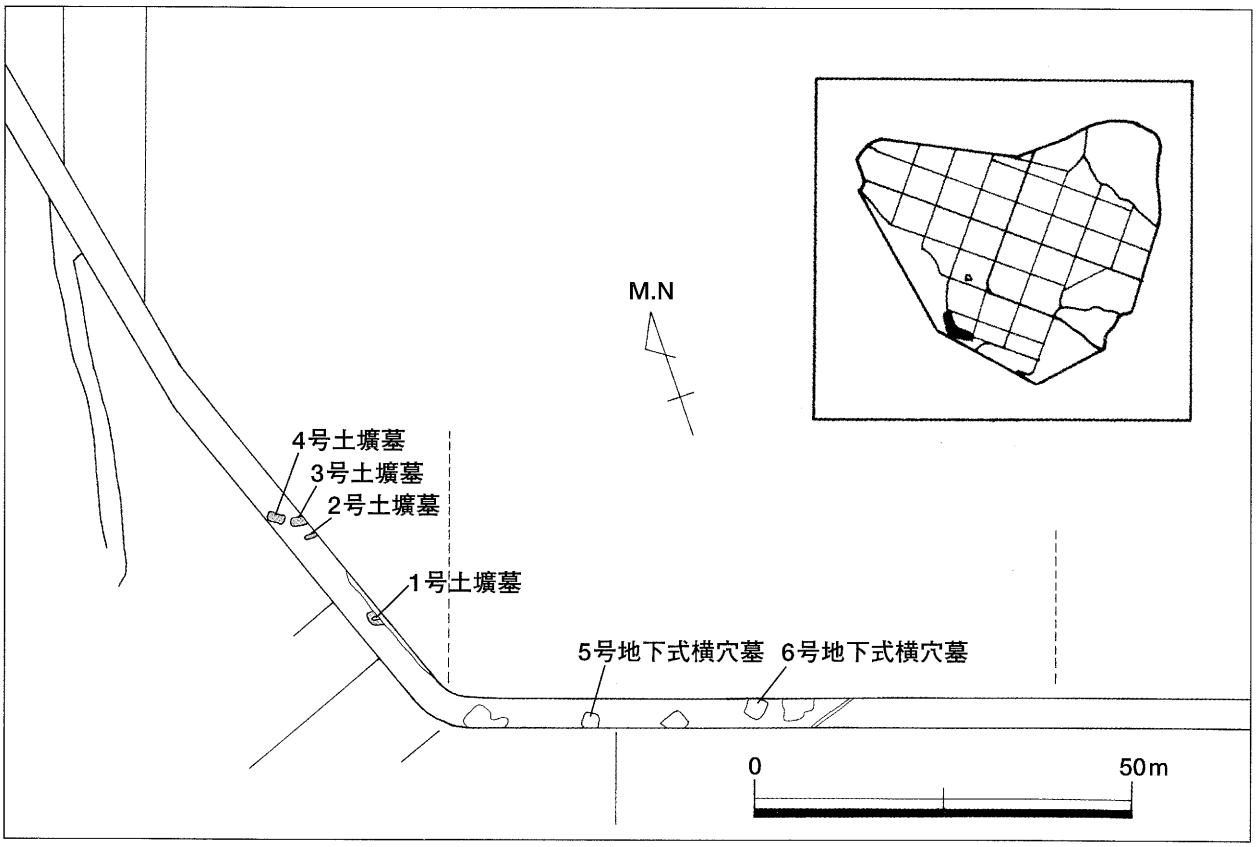
平成14年度の工事予定路線は８号支線が常心原地下式横穴墓群中を横切り、９号支線が国指定史跡常心塚古墳の外堤隅に近接するため、試掘調査は行わず工事区間内を本調査した。７号支線と10号支線の一部も工事区間内の路盤を全て剥ぎ、遺構を精査した。10号支線の北半分と１号支線、５号支線、11号支線、12号支線はトレンチ発掘による試掘調査を実施したが、いずれも遺構は確認されず、アカホヤ層が良好に遺存しているのを確認したにとどまった。総調査面積は8131.9㎡である。

結果として、８号支線では、地下式横穴墓２基と土壙墓４基、柱穴群を検出し、９号支線では、常心塚古墳の外堤外側に周溝を検出した。

第３節　遺構と遺物

１．８号支線の遺構（Fig. 3）

A．遺跡の現況



S＝1/1,000　　Fig.3　８号支線遺構配置図

8号支線の調査前の現況は、簡易舗装の農道として使用されており、総長319m、調査面積638㎡を測る。そのため、掘削前に墳丘などの目に見える遺構は残っていなかった。しかし、過去3基の地下式横穴墓が発見されているため、慎重に舗装路盤を剥ぐとすぐにアカホヤ層に達したので、この面で遺構を検出した。

B．常心原地下式横穴墓群の概要

西都市大字上三財字常心原、標高約60mの小豆野原台地上に所在する。従来の報告では『九州の横穴墓と地下式横穴墓第Ⅱ分冊（九州前方後円墳研究会編2001年）』において2基の地下式横穴墓の調査例が紹介され、平成13年度に調査された資料を『西都原古墳研究所年報36号（西都市教育委員会編2002年）』において常心原3号地下式横穴墓と報告し計3基の調査歴を示していたが、新たに日高正晴氏により1967年に1基調査されていたことが明らかになったため、この資料を3号地下式横穴墓とし、昨年度報告の3号地下式横穴墓は、4号地下式横穴墓に変更する。

地下式横穴墓群の特徴は、3号地下式横穴墓が妻入り長方形の玄室平面形を持ち、土器の副葬はなく、現在では群中で最も古い形態を持つ。2001年編集分の2基は平入り楕円形タイプと平入り長方形タイプの平面形でいずれも10～20cmほどの川原石を玄室内に敷き、屍床を設けていた。出土遺物から6c末の築造年代が推定される。4号地下式横穴墓の玄室平面形は平入り楕円形タイプで10～20cmの礫を敷き詰め、頭位を北にとり、須恵器の蓋坏を伏せて枕状に使用していた。特徴的なのは竪坑で、主軸方向で約4.5mを測り、墓道状に伸びるタイプのものである。出土須恵器の特長から7世紀前半の築造年代が推定される。

C．5号地下式横穴墓

（1）位置と現状

5号地下式横穴墓は8号支線の東端より約253mの位置で検出した。周辺に墳丘や周溝などはなく、道路幅中央から南半分にかけて主軸長207cm、幅160～200cmを測る台形プランの竪坑を検出した。プランの埋土には表面観察から、アカホヤ層より下層に堆積する層のブロック塊が多く混じり、深い掘削痕跡と推測できたため半裁したところ、礫による閉塞施設が確認できたので地下式横穴墓と判断した。調査の視点として、埋土に混じるブロック塊の観察には注意を向けた。

（2）竪坑（Fig. 4　Fig. 6）

竪坑埋土は計6層に分層できた。黒褐色土の中にブロックが多く混じる層群1、2、3、4層と、粘質の強い黒色土が主体を占め、腐食土層と考えられる5層、褐色土を主体に地山のブロックで形成され玄室掘削時の廃土を利用したかさ上げと考えられる6層である。3層に関しては、不自然な堆積で土質も差があり、樹根による撹乱層の可能性がある。

基本層序は、路盤の下に薄く黒褐色土層が入り、Ⅰ層：アカホヤ層、Ⅱ：黒色土層、Ⅲ：黒褐色ローム層（硬質）、Ⅳ：褐色ローム層（硬質）、Ⅴ：小林軽石層、Ⅵ：暗褐色層（軟質）、Ⅶ：明黄褐色層（軟質）である。

竪坑の平面形態は主軸長207cm幅160～200cmの台形で床面中央までの

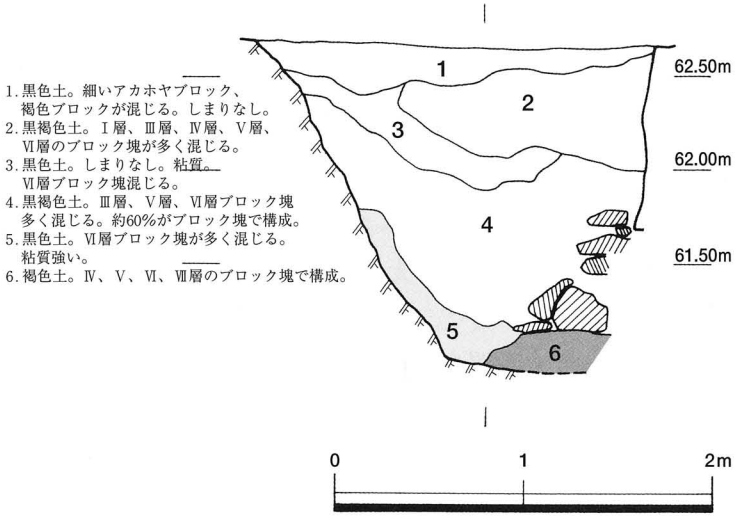


Fig.4　5号地下式横穴墓土層断面図　S＝1/40

深さ170cmを計る。遺構検出面はアカホヤ層であるが、竪坑埋土の中に黒褐色土が多く流れ込むため、実際の竪坑掘削面はさらに上の層である。

竪坑羨門側は傾斜角80°で立ち上がり、降り口側は傾斜角63°で立ち上がる。降り口側両隅には遺構検出面から90cmの深さまでに足場としての掘り込みがあるがそれより下には足場状の掘り込みはない。降り口側では、６つの傾斜変換点が認められ、上部分では、それに対応して足場状の掘り込みがあるため、掘削の段階を示すと考えられる。両側壁は傾斜角約74°で立ち上がる。竪坑は標高60.95mまで掘り下げられ、基本層序のⅥ層とⅦ層を中心にⅤ層の下半分（標高61.62m）から横穴を掘り込み、羨門・羨道を掘削する。竪坑床面は羨道、玄室を掘削する際の作業面として機能した後、掘削時の廃土（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層＝６層と対応）で床を造り、閉塞が行われる。

（３）閉塞施設（Fig. 5）

閉塞は羨門部分で、礫を用いて行われる。玄室掘削時の作業面を廃土＝６層で約17cm嵩上げし、まず約40cmの２石を羨道に挿入するように据え、20～30cmの石を２段積み、羨門の大部分を塞いだ後10～20cmの小ぶりの石で隙間をうめる。閉塞施設の範囲は、奥行き85cm、幅約110cm、高さ約45cmで、実際の掘削面から羨道天井の高さは約66cmを計る。粘土等による目張りなどの痕跡はなく、石を丁寧に積み閉塞していた。

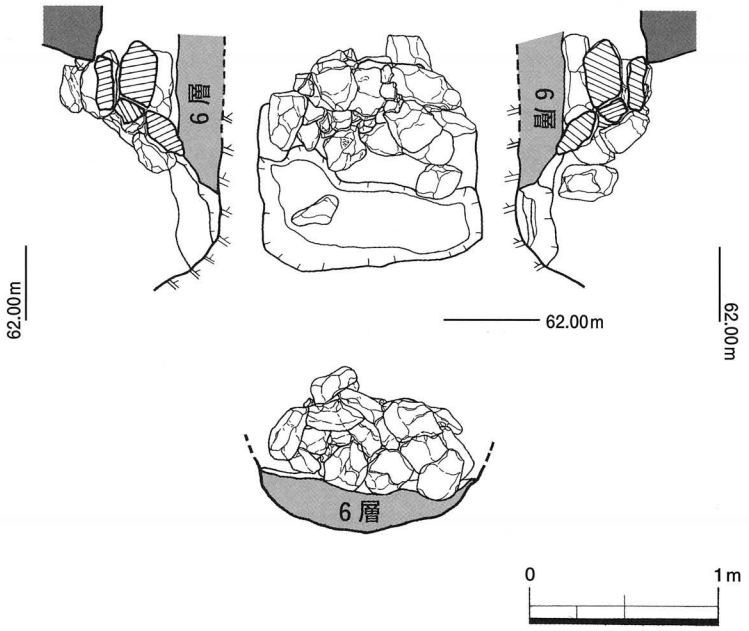


Fig.5　５号地下式横穴墓閉塞施設　S＝1/40

（４）玄室（Fig. 6）

主軸方位はN－37.5°－Eをとり、竪坑主軸に対してぶれない。玄室平面形態は妻入り方形タイプで隅角がやや丸みを帯び、天井はドーム形を呈す。主軸長203cm、幅224cm、玄室高97cmで、床面積は約4.5㎡である。奥壁長174cm、右側壁長219cm、左側壁長184cm、前壁長210cmで、右側壁側と前壁側がやや膨らむ右片袖気味の不整台形を呈す。この膨らみは屍床形成に関係するもので、礫を用いて玄室中心から右側壁にかけての空間に２基の屍床が設けてある。右を１号屍床、左を２号屍床とする。これに対して玄室中心から左側壁にかけてはなにもない。

２基とも前壁側に頭位をとり、頭部を据える30cm～40cmの大きめの石を枕状に置き、１号屍床は右側壁に沿わせて20cm～30cmの石を棺材状に縦位に据え、２号屍床との境には20～30cmの石を仕切りとして据える。大ぶりの石で囲んだ中には10cm以下の石を敷き詰める。２号屍床は、１号屍床に比べると雑で、20～30cmの石で周囲を囲うが奥壁側まで回らず、中に敷き詰める石も10～20cmと大きく隙間も多い。

玄室内の壁には掘削時に用いられた工具の痕跡が２種類残る。１つは、扇状の曲線的な痕跡で短い単位で連続して刻まれU字型の鋤や鍬先が推測でき、もう１つは直線的な長い単位の痕跡で、縦にカンナをかけたようなケズリ痕跡である。痕跡幅は10～15cmである。玄室床面の構造は保存のため調査していない。また、前壁には埋葬時に遺体に塗った赤色顔料が付着していた。

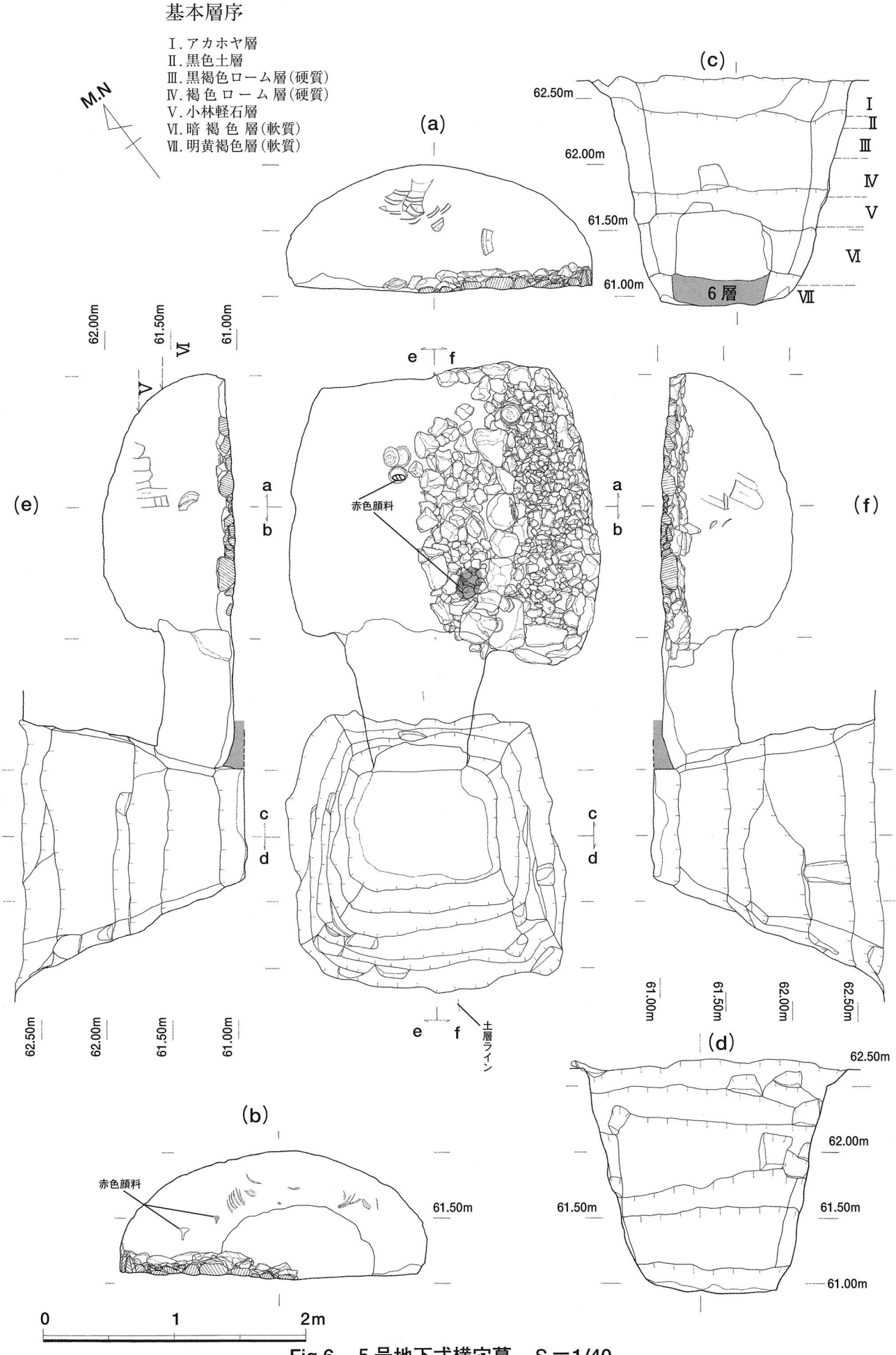


Fig.6　5号地下式横穴墓　S＝1/40

（5）出土遺物（Fig. 7　Fig. 8）

5号地下式横穴墓からは、玄室より人骨2体と須恵器5、鉄鏃3、短刀1、鹿角柄刀子2、ガラス玉4点が出土した。玄室天井が崩落することなく現在まで残っていたため、人骨、遺物の遺存状況ともに非常に良好であった。特に人骨については残りがよく、第Ⅳ章において詳述する。

人骨（Fig. 8）

2体が伸展位で、頭位を前壁側に向け出土した。1号屍床に埋葬された人骨を1号人骨、2号屍床に埋葬された人骨を2号人骨とする。1号人骨は成年女性、2号人骨は成年男性のものである。

須恵器（Fig. 7　Fig. 8）

1は坏蓋で、口径13.5cm、器高3.8cm、天井部から回転ヘラケズリが右回りでなされ口縁部付近は回転ヨコナデ後斜線を施す。天井部に重ね焼きの粘土粒が微量付着する。内面は回転ナデ→内面中央部を不定ナデ、口縁部のみ強い回転ヨコナデ、砂粒微量の精良胎土。2は坏身で、口径12.9cm、受部径14.2cm、最大径15.2cm、器高3.6cm、外面は底部から荒い回転ヘラケズリが中心から右回りでなされ口縁部付近は回転ヨコナデ、内面は回転ナデ、口縁部のみ回転ヨコナデ、口縁の立ち上がりは低く、付着物あり。砂粒多く胎土荒い。1が2の上に内面を上に向け重ねられた状態で、1号人骨の足元左脇に配置されていた。

3は坏身、口径12.2cm、受部径13.2cm、最大径14.0cm、器高3.8cm、外面底部から左回りに回転ヘラケズリ、口縁部付近は回転ヨコナデ、外面～口縁部に粘土粒が付着し、灰かぶり有り。内面は回転ナデ→底部中央不定ナデ、口縁は回転ヨコナデ、砂粒微量の胎土で口縁に打ち欠き痕跡有り。4は坏身、口径12.9cm、受部径14.0cm、最大径15.1cm、器高3.5cm、外面底部から左回りに回転ケズリ、口縁部は回転ヨコナデ、外面に底部から灰かぶり有り。内面は底部から回転ナデ→底部中央不定ナデ、口縁部回転ヨコナデ、砂粒微量の胎土で口縁部に付着物有り。5は坏蓋、口径13.9cm、器高3.9cm、天井部より左回りに回転ヘラケズリ、口縁部は回転ヨコナデ、外面に灰かぶり有り。内面は回転ナデ→中央部不定ナデ、口縁部回転ヨコナデ、内面の1/2に赤色顔料が付着し、天井部を下にして出土したため、坏身として使用したと考えてよい。3．4、5は2号人骨足元左脇に配置していた。

鉄鏃（Fig. 7）

6は腸抉三角形式鏃で2段逆刺、有茎で茎部には木質が残り樹皮が巻かれる。全長14.0cm、鏃身部長6.5cm、頸部長4.8cm、茎部長3.9cm、有関である。7は腸抉三角形式鏃で、有茎で茎部には木質が残り、鏃身部を中心に錆ぶくれが進む。全長13.5cm、鏃身部長6.7cm、頸部長4.4cm、茎部長3.8cm、有関である。8は腸抉三角形式鏃で木質が残る。全長7.0cm、鏃身部長3.8cmを計る。鉄鏃については杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」（『橿原考古学研究所論集』8）を参照した。

ガラス玉（Fig. 7）

9、10、11はガラス小玉である。9は青緑色で径3.8mm、厚さ4.1mm、孔径1mm。10は青色で径4.5mm、厚さ2.0mm、孔径1.5mm。11は青緑色で径3.9mm、厚さ3mm、孔径1mm。

鹿角柄刀子（Fig. 7）

12は鹿角柄の刀子である。直刀と伴に1号人骨に伴って出土した。現存長18.5cm、刃部長5.5cm、を計り、刃部の欠損が著しい。13も鹿角柄の刀子で2号人骨に伴い出土した。全長19.5cm、刃部長5.5cm、背幅2.5mmを計る。

直刀（Fig. 7）

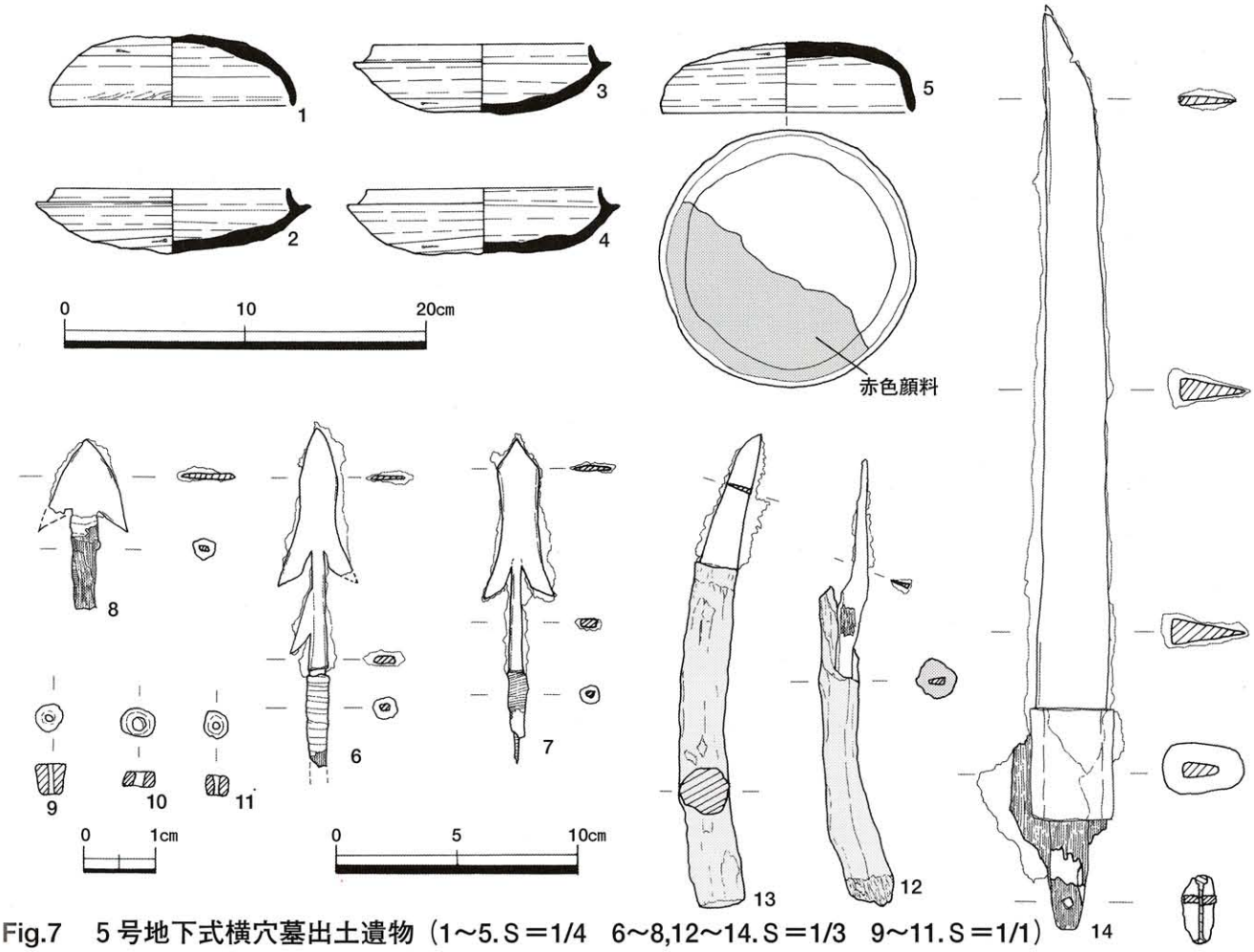


Fig.7　5号地下式横穴墓出土遺物（1～5.S＝1/4　6～8,12～14.S＝1/3　9～11.S＝1/1）

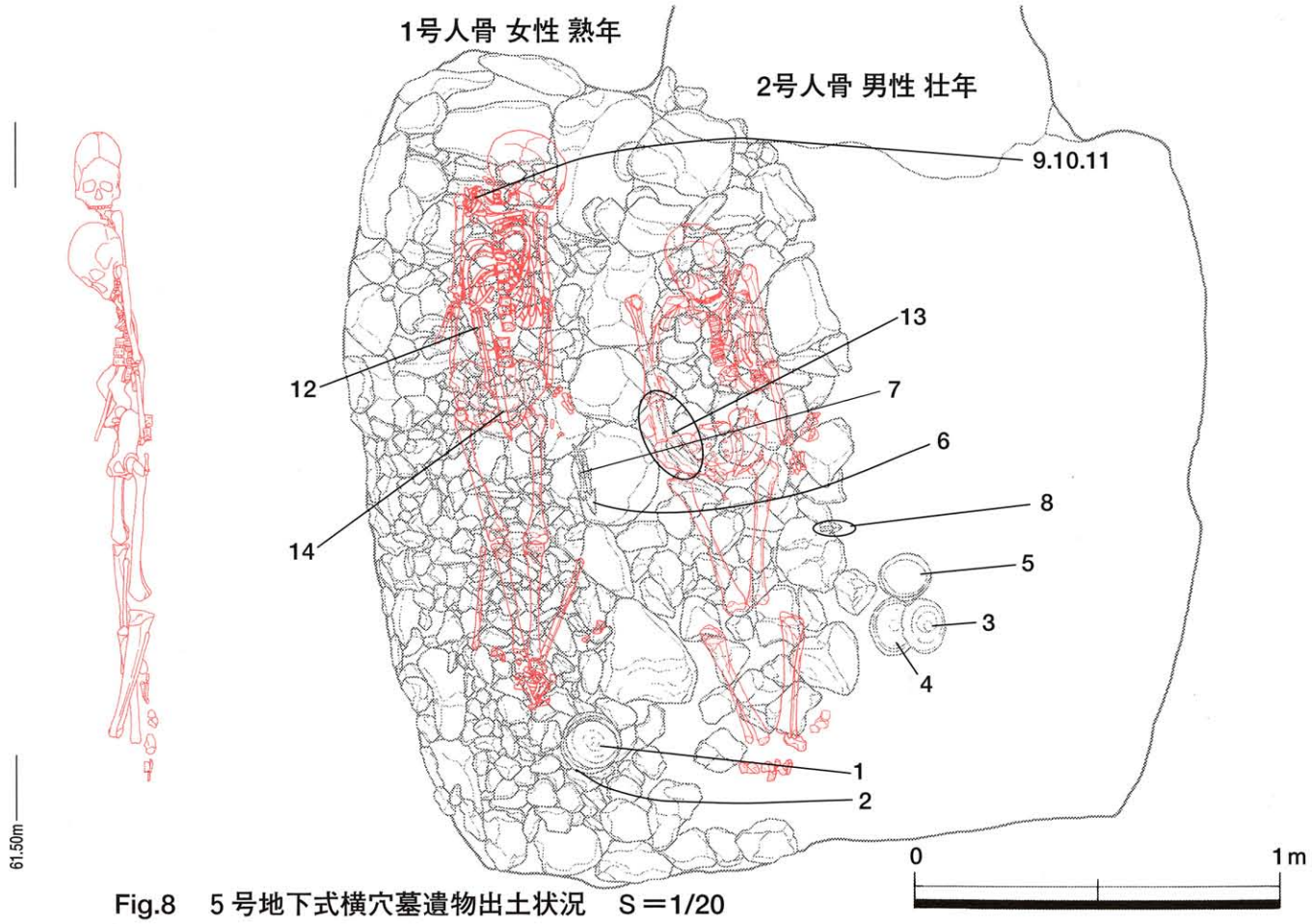


Fig.8　5号地下式横穴墓遺物出土状況　S＝1/20

14は直刀で、１号人骨腹部上に乗せられた状態で出土した。現存長37.6cm、刃部長29.2cm、刃部幅２～３cm、背幅１cm、柄部長9.0cmを計る。

D．６号地下式横穴墓

（１）位置と現状

６号地下式横穴墓は８号支線の東端より約175mの位置で検出した。周辺に消失墳の周溝などの痕跡はない。平面形長方形のプランを検出し、埋土に下層のブロックが混じることから、半裁して掘り下げると閉塞施設が出土したため、地下式横穴墓と判断し調査を行った。

遺構検出面はアカホヤ層である。北側を側溝により切られていた。

（２）竪坑（Fig. 9　Fig.11）

竪坑埋土は、計５層に分層した。地山の基本層序は５号地下式と同じ７層に分かれる。

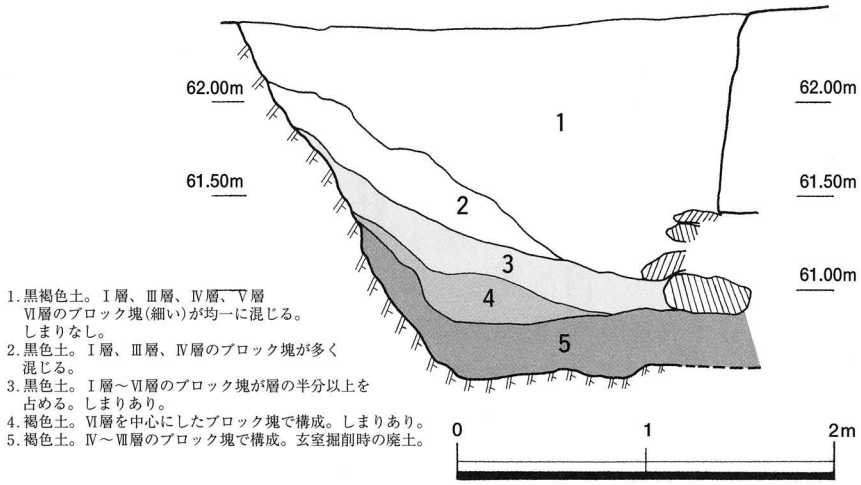


Fig.9　６号地下式横穴墓竪坑土層断面図　S＝1/40

１層はしまりのない黒褐色土に偏りなく均一にⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層の地山ブロック塊が混じる粘質の層で、竪坑埋土の半分以上を占めるが、更に細分できる明確な単位はない。２層は黒色土が主体で１層に比べて、地山のブロック塊が混じる割合が多く、特にⅠ、Ⅲ、Ⅳ層ブロックが多く混じる。３層は黒色土に地山ブロック塊の混じる割合が60%以上で、しまりがある。４層はⅣ、Ⅴ、Ⅵ層のブロック塊で構成されしまりがある。層上面からは礫も出土し２次床面の可能性が高い。５層はⅣ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層で構成され、玄室掘削時の廃土と考えられる。５層上面は初葬時床面と考えられ、この層を除去すると地山Ⅶ層にあたって竪坑の掘削は終わり、掘り方は不整形で面をなしていない。土層断面からは４つの下降面が見える。２層上面、３層上面、４層上面、５層上面である。

竪坑の平面形態は、主軸長は270cm、幅235cmの長方形で、掘削床面最深部までの深さ約206cmを計る。５号地下式同様、実際の竪坑掘削面は更に上の層である。

竪坑羨門側はほぼ垂直に立ち上がるが、降り口側は傾斜角61.5°で立ち上がる。５つの傾斜変換点があって、それに対応して遺構検出面から約120cmの深さ（標高61.43m）までに足場の掘り込みが認められる。階段ほどのしっかりした掘り込みではなく、標高61.43m付近以下にはない。両側壁は傾斜角73～75°で立ち上がる。竪坑は標高60.52mまで掘り下げられ、基本層序のⅥ層（軟質）とⅦ層（軟質）から横穴を掘り込み、羨門、羨道を掘削する。床面は羨道、玄室を掘削した後掘削時の廃土（５層と対応）で床を作る。右側壁には扇状の掘削痕が明瞭に残る。幅20cmを計る。

（３）閉塞施設（Fig.10）

閉塞は羨門部分で礫を用いて行われる。玄室掘削時の床面を羨門部において約28cm嵩上げし、まず50～60cmの大ぶり縦長の３石を羨道に挿入する形で据え、その上に30～50cmの石を２～３段積み、羨門の大部分を塞いだ後20cmほどの小ぶりの石で隙間を埋めるように積む。閉塞規模は奥行き76cm、幅約116cm、高さ50cmで、実際の掘削面から羨道天井の高さは約70cmを計る。粘土等による目張りなどの痕跡はなかった。

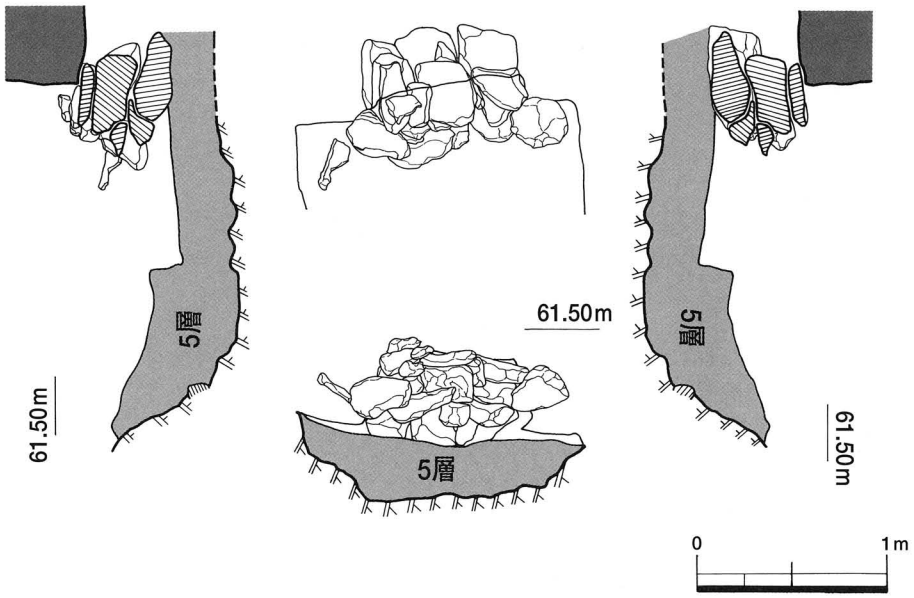


Fig.10　６号地下式閉塞施設　S＝1/40

（１）玄室（Fig.11）

主軸方位はN－55°－Eをとり、竪坑主軸に対してぶれない。玄室平面形態は、妻入り方形タイプで、前壁側が広い台形を呈し隅角を残し、天井は寄棟形を呈す。主軸長213cm、幅205cm、玄室高100cm、床面積は約4.6㎡を計る。奥壁長185cm、前壁長218cm、右側壁長214cm、左側壁長194cmで、前壁右側がやや膨らむ。玄室内は10～20cmの礫が全面に敷かれる。前壁側には30～40cmの大ぶりの石が枕状に配され、玄室中心から前壁側に80～90cm、主軸から右に70～85cmの所には赤色顔料や人骨紛が付着することから埋葬頭位は前壁側である。５号地下式に比べると明確な屍床の区画は認められないが、側壁に沿って配される石は20～30cmの大ぶりの石材が使用される。左側壁側も枕状の大型の石が前壁側に配され、赤色顔料や人骨紛が右側壁側に比べると微量だが付着していたため、埋葬空間として使用されていたと考えてよい。

玄室内の壁には掘削時の工具痕跡が５号地下式同様２種残り、天井から側壁にむかってケズリ下ろすような工具痕跡が多くを占め、扇状の短い単位の掘削痕は少ない。ケズリ状の痕跡は幅が約10cmで壁を整形する加工であろう。扇状のものは痕跡の幅が15～20cmを計る。また、工具痕とは別の２本平行する斜線が不規則に刻まれ、線刻の可能性がある。

玄室中央から奥壁に向かって３体分の人骨が集骨されており、それに伴い須恵器の坏身６点、坏蓋２点が主軸方向に並んでいた。

（２）出土遺物（Fig.14）

６号地下式横穴墓からは、３体分の人骨とそれに伴う須恵器、左側壁に寄せられて須恵器、鉄鏃、玄室右奥隅に寄せられて鉄製品、鹿角が出土した。集骨行為により玄室内が埋葬時の状態を保って

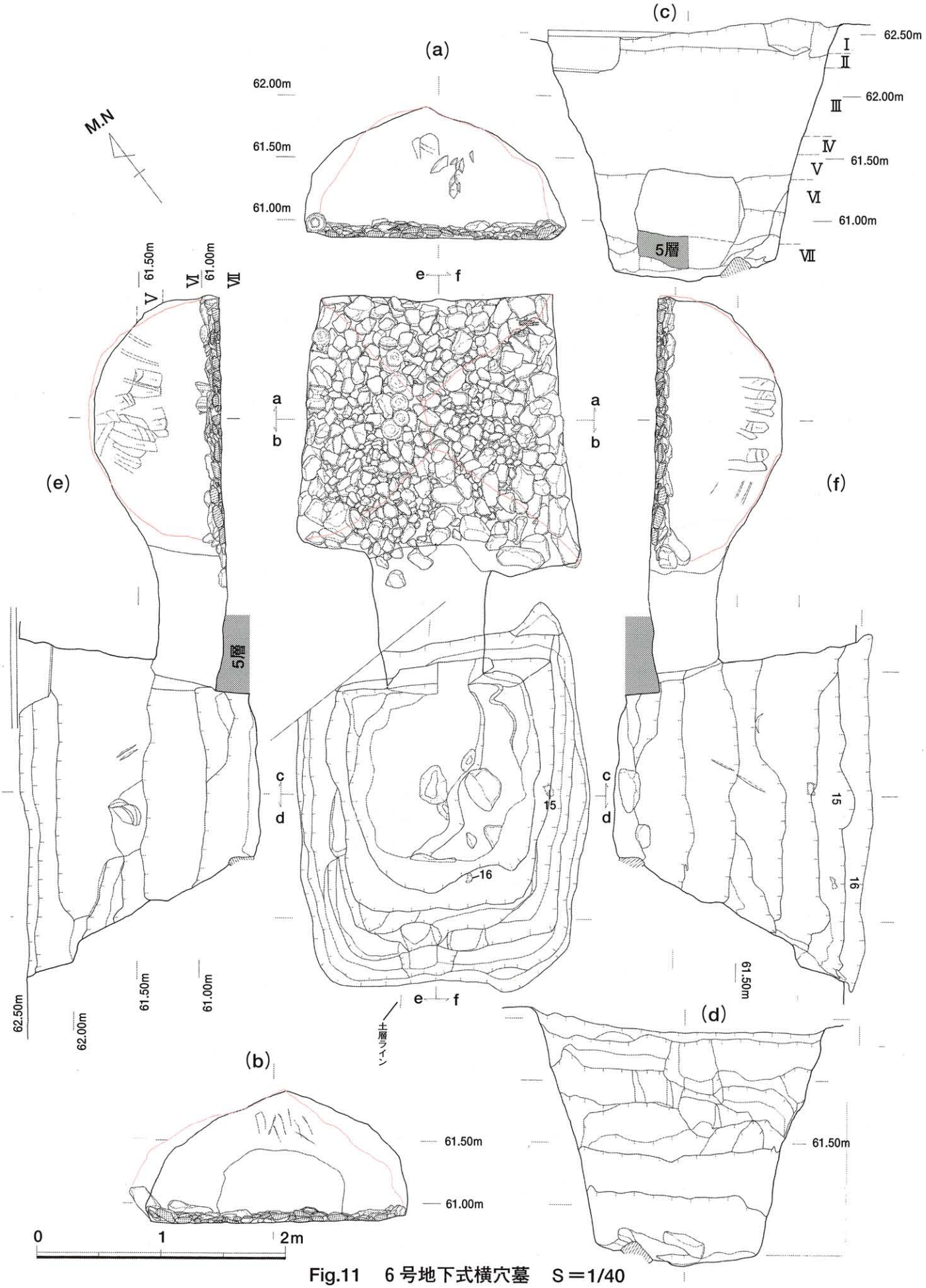


Fig.11　6 号地下式横穴墓　S＝1/40

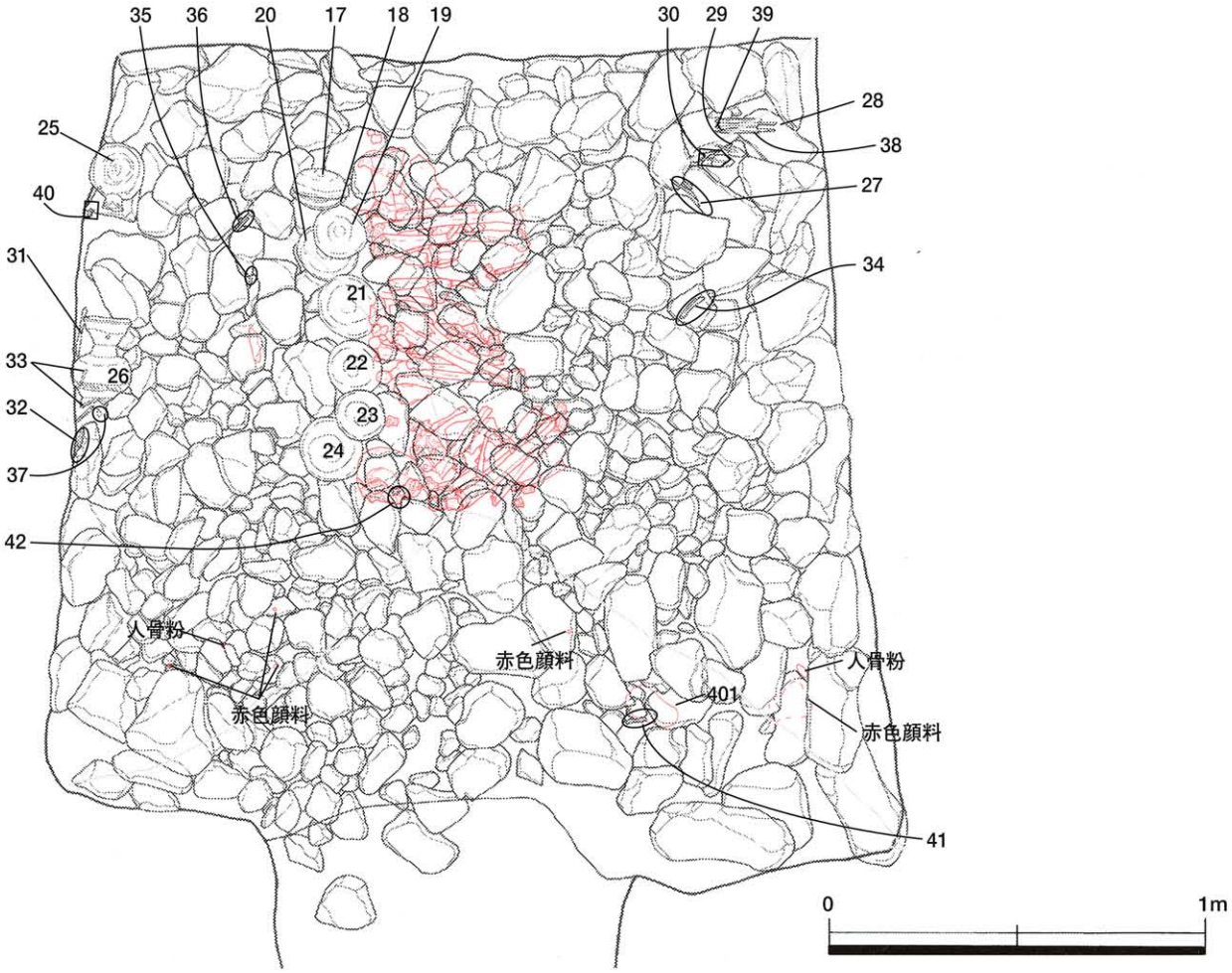


Fig.12　6 号地下式横穴墓遺物出土状況　S＝1/20

1 号人骨
101　腓骨片
102　左踵骨
103　左大腿骨遠位端
104　右大腿骨骨体部
105　左大腿骨骨体部
106　左上腕骨骨体部
107　仙骨
108　右踵骨
109　頭蓋
110　左寛骨
111　右大腿骨遠位端
112　下顎骨左半分

2 号人骨
201　右寛骨
202　右踵骨
203　腰椎
204　左大腿骨
205　右脛骨
206　左脛骨
207　左大腿骨遠位端
208　椎骨
209　右寛骨
210　右脛骨近位端
211　右上腕骨
212　右橈骨
213　右大腿骨

3 号人骨
301　頭蓋
302　下顎骨
303　左大腿骨
304　右大腿骨
305　左脛骨
306　右脛骨
307　仙骨
308　右寛骨
309　左寛骨
310　左尺骨
401　1 号人骨頭蓋片（蝶後頭軟骨結合部）

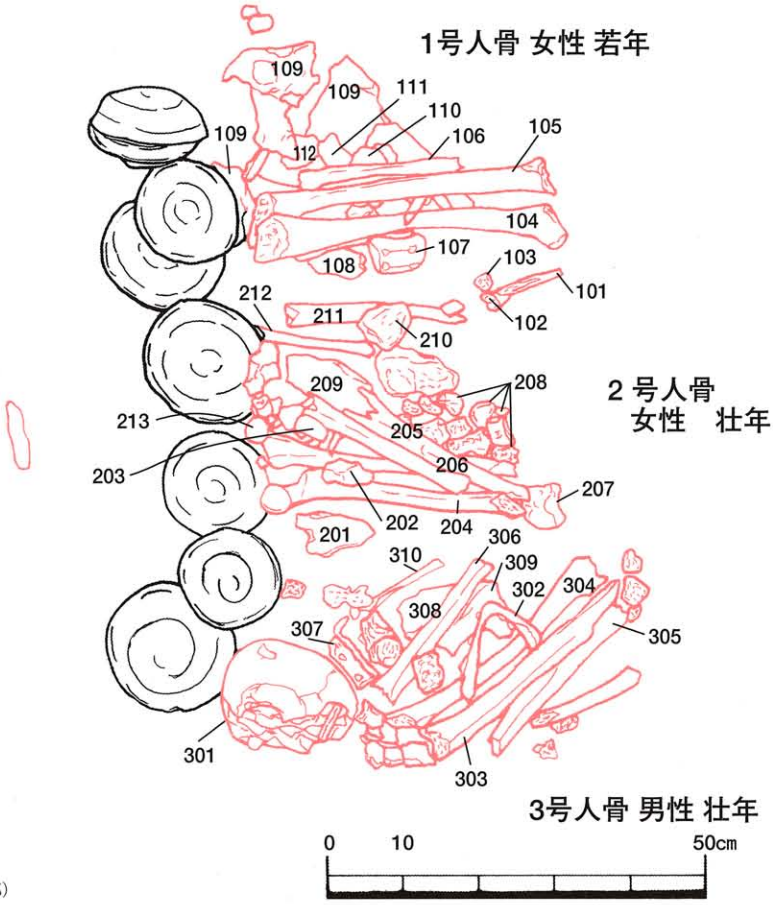


Fig.13　6 号地下式横穴墓集骨状況　S＝1/10

いないため原位置ではない。また敷石も浮いた状態のものが多かった。

人骨

玄室中央から奥壁に向かい3つの単位で集骨されていた。調査の結果、人骨は3体分あり、須恵器の蓋坏が集骨の単位に沿って並ぶ。奥壁側から1号人骨、2号人骨、3号人骨とする。第Ⅳ章で詳述される。

須恵器

17は坏蓋で口径13.5cm、器高4.2cm、天井部から左回りで回転ヘラケズリ、天井部と体部の境が明瞭、口縁部に右上がりの斜線が施される。外面に赤色顔料が付着する。内面は回転ナデ、口縁部は回転ヨコナデ、内面に褐色の付着物あり。砂粒微量の胎土。18は坏身で、口径11.8cm、受部径13.1cm、最大径14.4cm、器高4.5cm、外面底部から左回りの回転ヘラケズリ、受部は回転ヨコナデ、内面は回転ナデ→底部中央を不定ナデ、口縁を回転ヨコナデ、内外面に褐色の付着物あり。19は坏身、口径11.4cm、受部径13.0cm、最大径14.1cm、器高4.3cm、外面底部から左回りの回転ヘラケズリ、受部は回転ヨコナデ、くぼみが全周、底部に工具痕あり、内面底部は回転ナデ→不定ナデ、口縁部は回転ヨコナデ、受部に白色の付着物あり。砂粒微量の胎土で焼成がやや軟質。20は坏蓋で、口径13.5cm、器高4.1cm、天井部から左回りの回転ヘラケズリ、体部から口縁にかけて回転ヨコナデ、天井部と体部の境が明瞭で、外面口縁に白色の付着物、内面は中央から回転ナデ→不定ナデ、口縁部回転ヨコナデ、内面に黄褐色の付着物あり。21は坏身で、口径12.8cm、受部径14.1cm、最大径15.4cm、器高4.2cm、外面底部から左回りに回転ヘラケズリが受部付近まで施され、受部は回転ヨコナデ、くぼみが全周する。内面は底部から回転ナデ→不定ナデ、口縁は回転ヨコナデ、内外面に付着物あり。22は坏身で、口径11.6cm、受部径12.6cm、最大径13.7cm、器高3.4cmで外面底部から左回りの回転ヘラケズリ、受部回転ヨコナデ、内面底部から回転ナデ→不定ナデ、口縁部は回転ヨコナデ。23は坏身で、口径11.3cm、受部径12.5cm、最大径13.5cm、器高3.1cm、外面底部から左回りの回転ヘラケズリ、受部回転ヨコナデ、内面底部は回転ナデ→不定ナデ、口縁部回転ヨコナデ、砂粒微量の胎土。24は坏身で口径13.0cm、受部径14.3cm、最大径15.2cm、器高4.4cm、外面底部より左回りの回転ヘラケズリ、受部は強い回転ヨコナデ、内面底部は回転ナデ→不定ナデ、口縁部は回転ヨコナデ、受部から内面に付着物あり。焼成がやや軟質。25は提瓶で、口縁部は回転ナデ、体部との境に接合痕有り。体部に把手が退化したと考えられる突起を張付する。体部は最大径を中位に求め、両面とも回転カキメ調整を施す。26は台付長頸壷又は直口壷で口縁から頸部を欠損し、体部との接合は丁寧でシボリ痕が残る。体部に2条の沈線を巡らし、その間に櫛状工具による刺突文を施す。比較的丸みを帯びた体部で、体部下位から底部には左回りのヘラケズリを施し、体部中位の最大径をなす部分はミガキ状のナデ調整を施す。頸部径7.0cm、胴部最大径14.8cm、脚裾径13.3cm、脚部高は8.6cmを計り、3方向から外面より円形のスカシを不均等に穿孔する。頸部の破片は玄室内からは出土せず、欠損した状態で使用したものと考えられ、打ち欠きの可能性もある。

鉄鏃

27、28は方頭鏃で、27は全長10.2cm、28は全長10.7cmを計り、茎部に木質が残る。29、30は三角形鏃で、29が鏃身長4.7cm、頸部長3.5cm、茎部長2.0＋αcm、30が現存長11.3cm、鏃身長4.6cmを計る。31、32、33、34、35、36、37は長頸鏃である。31は長頸鏃の鏃身部から茎部、現存長13.9cmで木質が残る。32は長頸鏃の鏃身部から頸部、現存長10.1cm、33は長頸鏃の鏃身部から茎部、現存長13.7cm、34は長頸鏃で破断し、錆によりゆがむ。現存長7.1cm。35は長

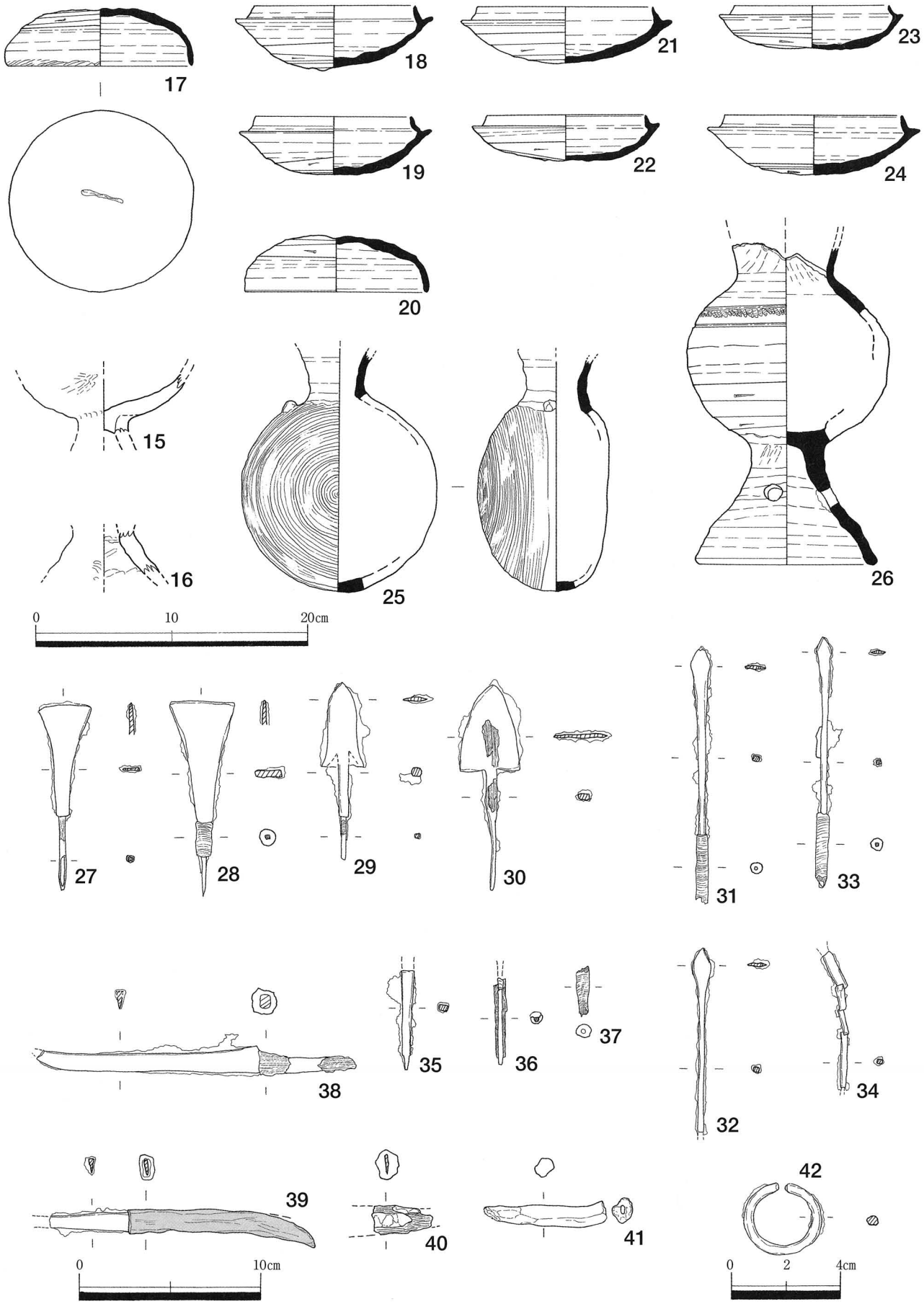


Fig.14　6 号地下式出土遺物（15～26. S＝1/4, 27～41. S＝1/3, 42. S＝1/2）

頸鏃で頸部から茎部。36は茎部で木質が残る。37も茎部片で木質が残る。

刀子

右奥隅に寄せられた鉄器群の中から出土した。38は刀子の刃部から茎部で鋒は欠損、刃部長17.5＋αcm、刃部幅1cm、茎部長4.8cmで不均等両関、茎尻は隅切か欠損。木質が残る。39は鹿角柄の刀子だが、破損が著しく、現存長14.7cmである。40は刀子の柄である。

その他の遺物

土師器は竪坑から出土した2点の破片のみである。15は高坏の杯部、16は脚部であり同一固体と考えられる。

41は用途不明だが鹿角製の遺物である。現存長6.7cmを測る。42は耳環で、最大径2.8cm、断面4mm。3号集骨下から1点のみ出土。

E．その他の遺構

（1）土壙墓群

5号地下式横穴墓から北西約75～128mの位置に4基の土壙墓が検出できた。東側から1号、2号、3号、4号とする。1号土壙墓は半分を側溝に切られていた。主軸をW－8°－Nにとり、幅154cm、深さ43cmを計る。2号土壙墓は一部を側溝に切られるが、主軸をW－5°－Nにとり、主軸長149cm、幅63cm、深さ45cm、2段の掘り方で、4隅に礫が配されるが、据えた状態ではなく、浮いて出土したので板蓋を押さえたものであろう。主軸方向西端には朱が付着し、頭位を示す。最も小型である。3号土壙墓は一部を側溝に切られるが主軸をW－14°－Nにとり、主軸長201cm、幅114cm、二段掘りを呈し、深さ45cmを計り、2段目掘り方の幅は43cmを計る。4号土壙墓は主軸をN－49°－Wにとり、主軸長228cm、幅124cm、深さ68cmを計り、2段掘りを呈するが2段目掘り方は幅41cmを計り、遺体を安置するには非常に狭い。1段目の掘り方には礫が2段目掘り方の小口部分に1石ずつ配される。

いずれの土壙墓も、遺物は出土していないため、時期など地下式横穴墓群との関係は不明である。

2．9号支線（Fig.16）

遺跡の現状は8号支線同様、農道であった。8号支線の北側約250mに位置し、平行する道路で調査面積2630.8㎡である。

調査区からは溝や、不整形な土坑が検出されたが遺物を伴わない。主な遺構は、常心塚古墳外堤

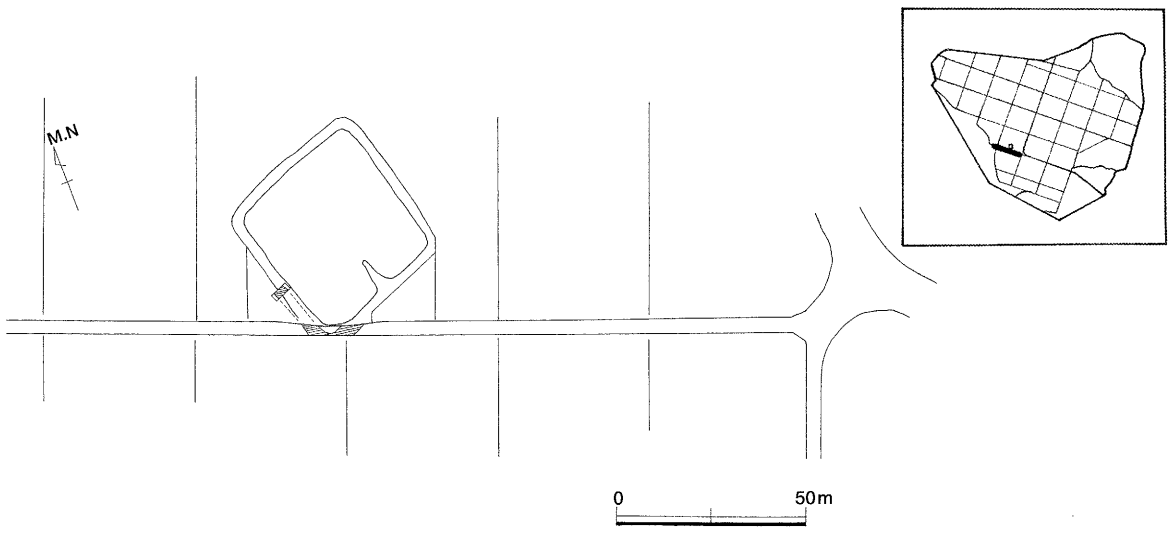
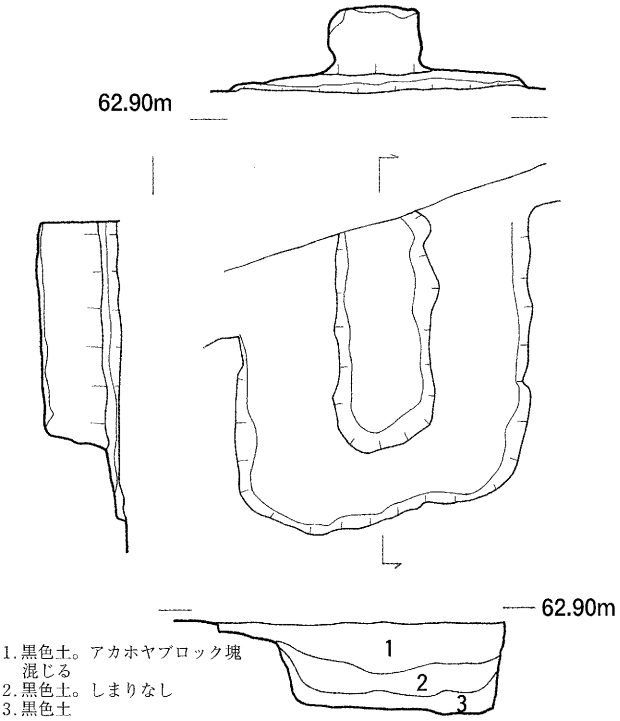
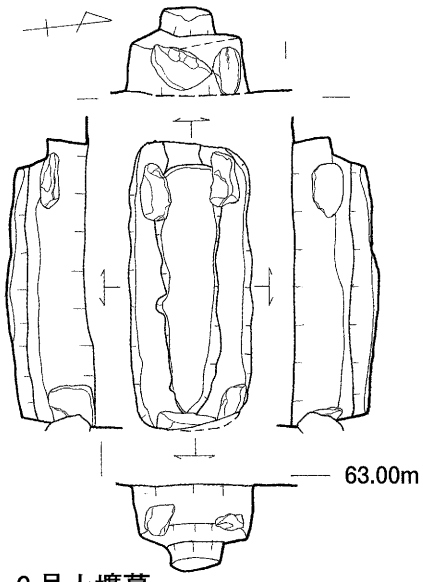


Fig.16　9号支線遺構配置図　S＝1/2,000

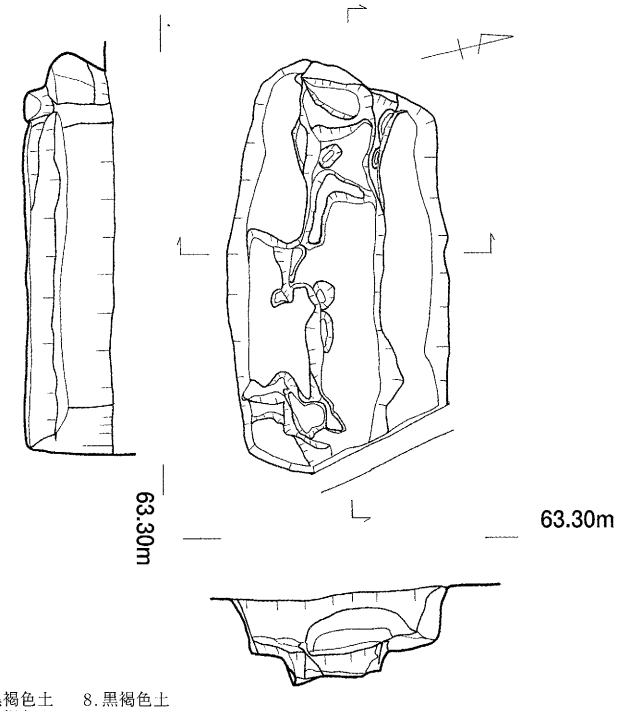


1.黒色土。アカホヤブロック塊混じる
2.黒色土。しまりなし
3.黒色土

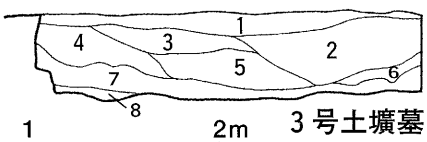
1号土壙墓



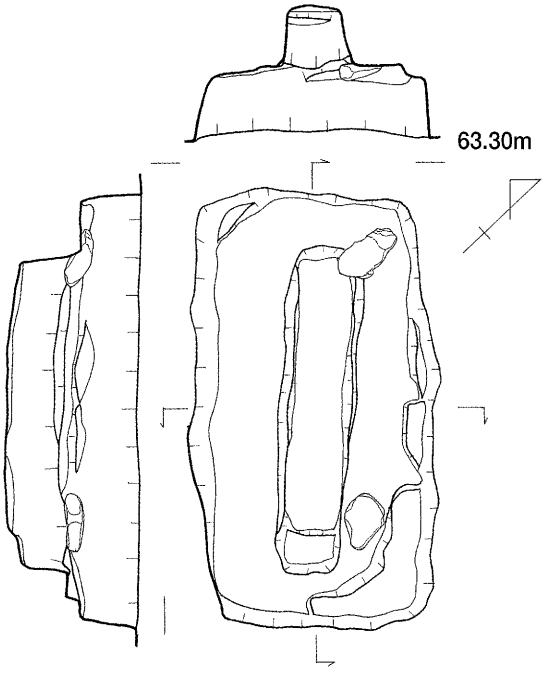
2号土壙墓



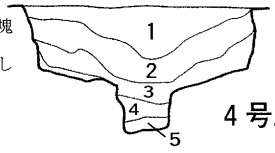
1.黒褐色土
2.黒褐色土
3.黒色土
4.黒褐色土
5.黒褐色土
6.黒色
7.黒褐色土
8.黒褐色土



3号土壙墓



1.黒色土。しまりなし
2.黒色土。
1層より暗い
3.黒色土。ブロック塊まじらない。粘質
4.黒色土。しまりなし
5.黒褐色土



4号土壙墓

0 1 2m

Fig.15 土壙墓 S＝1/40

外側に回る周溝である。

A．常心塚古墳の現状

西都市大字上三財字常心原にある方墳で墳丘の周囲に外堤を持つ。昭和55年（1980）に国指定史跡となる。現状の推定墳丘主軸をN－15°－Wにとり、ほぼ南北を向き、小豆野原台地の南西端に位置する。現在、周辺に墳丘を持つ古墳はなく、１基単独で所在する。古墳から周囲の地形を観察すると、北には九州山地が控え、南には三財川が東西方向に流れ、東側に向かって台地の尾根がのびる。墳丘の現状は、周囲を畑に囲まれ外堤外側に沿い畑への進入路が廻るため、外堤が全体的に削平を受る。外堤は墳丘周囲を全周せず、南側でとぎれ、墳丘上に建てられた祠堂に登るための石段両脇につながる。祠堂の裏に約100cmの礫が露出しており、内部主体の石材かも知れないが確証はない。墳丘には桜が植えられ、枯死した倒木により墳丘北側を中心に多く撹乱を受ける。特に墳丘頂部は削平を受け、墳丘東側と西側が比較的遺存状況がよい。過去に測量調査や発掘調査は行われていないため、古墳に関する資料はほとんどない。

参考文献　日高正晴「常心塚古墳」『宮崎県史資料編 考古2』1993年

B．調査の概要

今回の調査で、９号支線下から常心塚古墳外堤外側に周溝を確認した。

遺構検出面はアカホヤ層上面で、ちょうど外堤の南西隅角部分が検出できたので、周辺の畑作に影響のない外堤西辺に対し垂直方向に溝の延長を確認するトレンチを設定し掘削したところ、アカホヤ層上面で溝の延長を確認した。

また、調査区内の周溝１ヶ所を１mの幅で掘削したところ、34点の須恵器破片が出土した。遺構検出面でも須恵器破片が出土した。

周溝は掘削部分で幅310cm、深さ135cmを計り、外堤側で１段、外側で２段傾斜を変え、平坦な周溝底部に至る。

土層は19層に分層した。大きく４つの層群に分かれる。A：最初に堆積した黒色土層（18、19層）、B：外堤側から堆積した層群（３、４、５、６、９、10、11、12、15層）、C：外側から堆積した層群（７、８、13、14、16、17層）、D：道路舗装の影響を受けた層群（１、２層）である。主体をなすのは、B群であり、多くのブロック塊を含む。目安ではあるが、遺物の出土したレベルを土層図に対応させると、３つの遺物群がある。

Ⅰ：A群が堆積した後に流れ込む遺物群。Ⅱ：11層が堆積した後、10層の堆積に対応する遺物群。Ⅲ：９層が堆積した後、４、５、６層の堆積に対応する遺物群である。

また常心塚古墳の墳丘測量を行った。S＝１/100で25cm間隔の等高線を入れた。現状での推定主軸では墳端が明確な東西方向（C－C'）で外堤間が37.5m、墳丘長が23.8mを計り、南北主軸（A－A'）では南側が撹乱を受け墳端を決めづらいが外堤間が39.9m、墳丘長が25mを計る。現状の南側墳端（標高65.24m）から墳丘最高点（標高69.05m）までの比高差は3.8mを計る。現状の外堤は北東隅と南西隅を結ぶ対角線方向にやや長い菱形状の方形を呈すが、南西隅で外側に周溝が検出されたことで、外堤が１～2.5m程削平されていたことがわかり、実際の外堤規模は大きくなることが確認され、菱形状の形態もあくまで現状の形であることが分かった。墳丘も墳頂部は削平を受けており、比較的残りのよい東西の墳丘では２段の傾斜変換線が認められ最低でも２段築成、墳頂部の削平を考慮すると３段築成の墳丘が想定できる。

C．周溝出土遺物（Fig.19）

周溝検出面と周溝トレンチからは須恵器破片が多数出土しているが、図化に耐え得る物で時期判断資料になるものを報告する。43は坏身で、Ⅰ群から出土。受部と体部の境の厚みが薄く、高度な

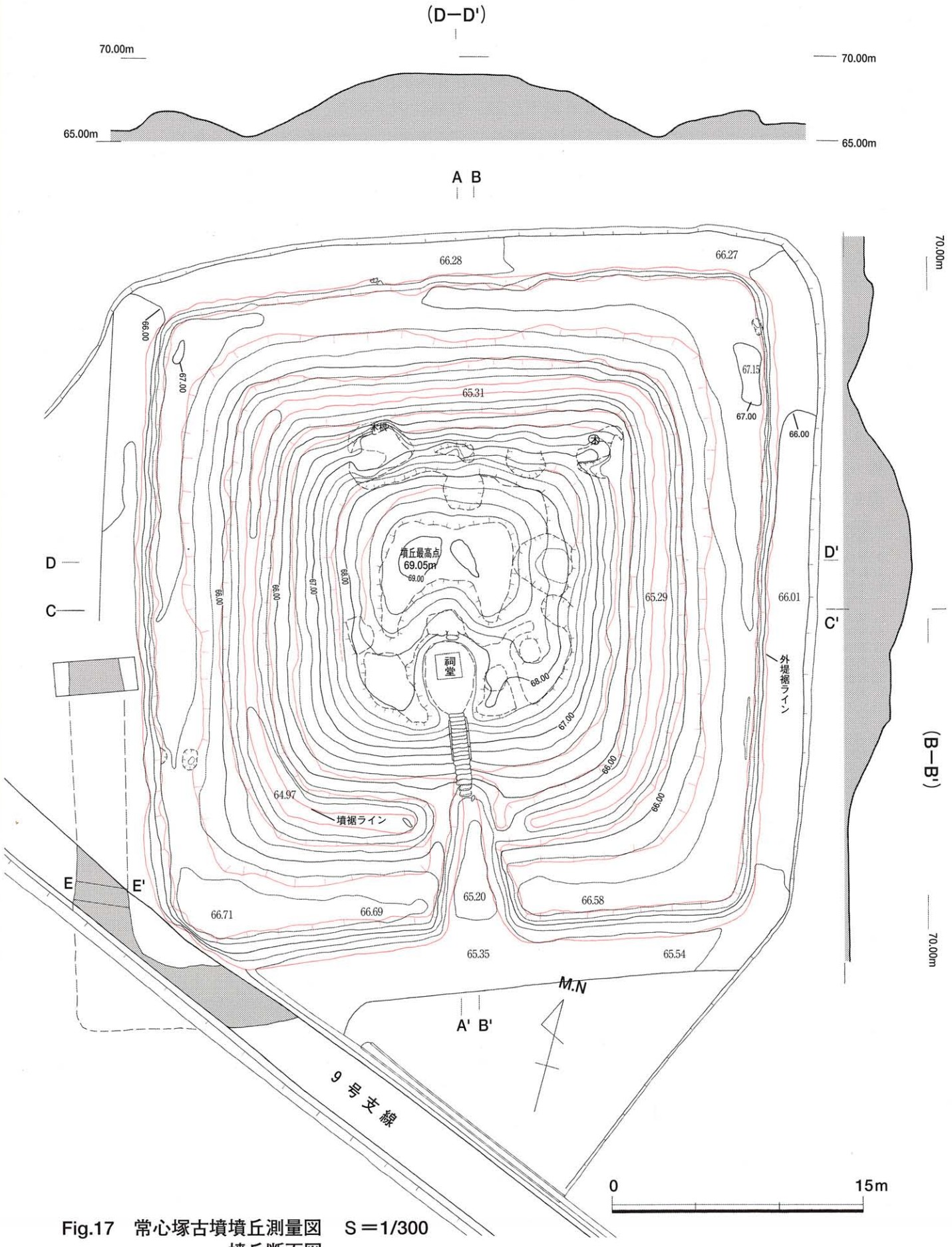


Fig.17　常心塚古墳墳丘測量図　S＝1/300
墳丘断面図

製作技術を推測させる。44はⅠ群、杯G口縁か無蓋高坏の口縁で薄い。45は、高坏の脚部で2条の凹線をはさんで2方向2段透かしを穿孔する。外面は回転ナデ、シボリ痕有り、内面には明瞭にシボリ痕が見える。46は坏蓋で口縁にカエリを持ち天井部は回転ヘラケズリを施す。47は大甕の口縁部でⅢ群、3条の凹線の間に斜線文を施す文様。外面に灰かぶり、断面芯部は生焼け状で紫灰色、口縁端部はシャープ。48は、Ⅱ群で高坏の脚部、回転ナデ、49は坏蓋で、カエリを持つ。

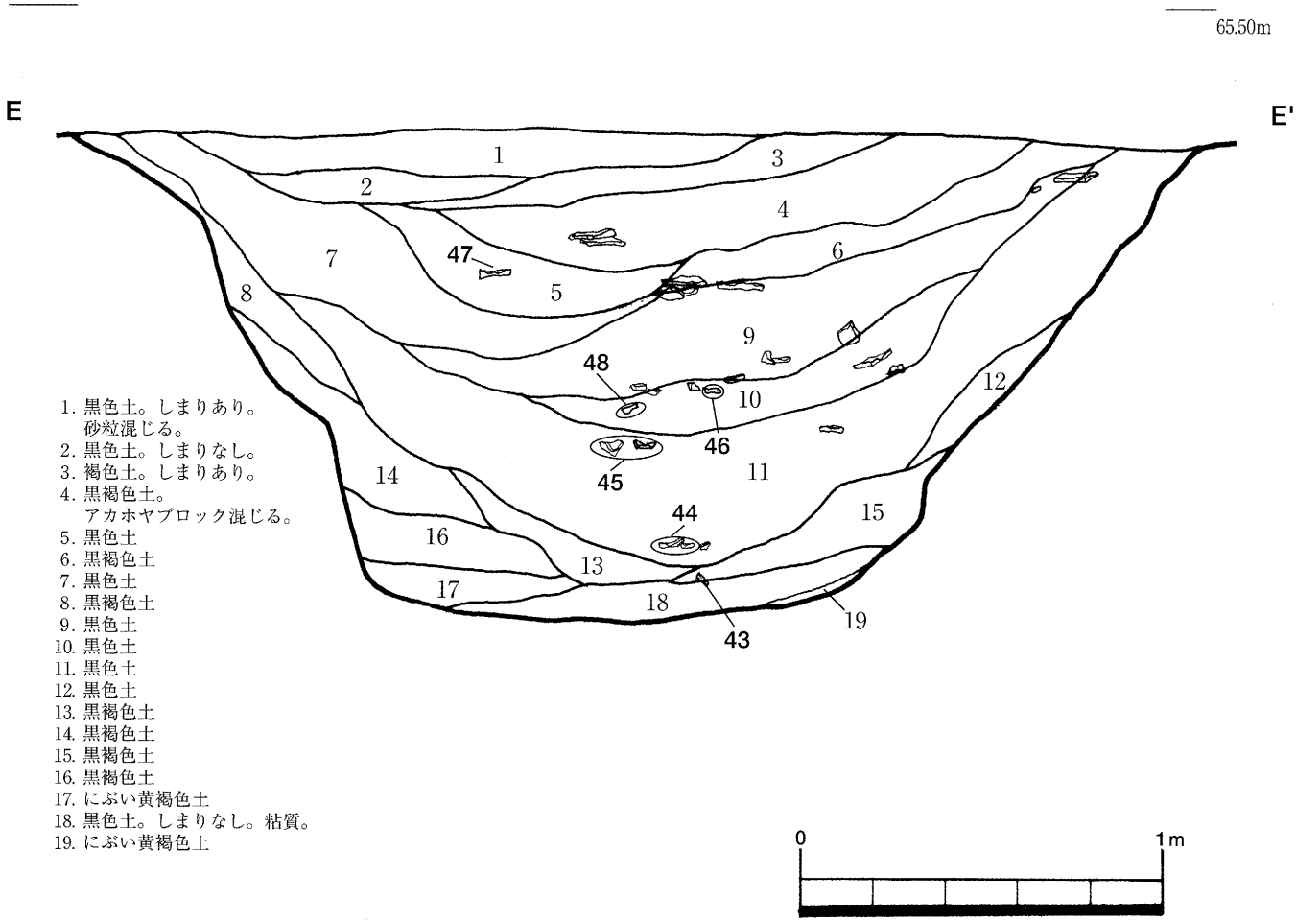


Fig.18　常心塚古墳外周溝土層断面図　S＝1/20

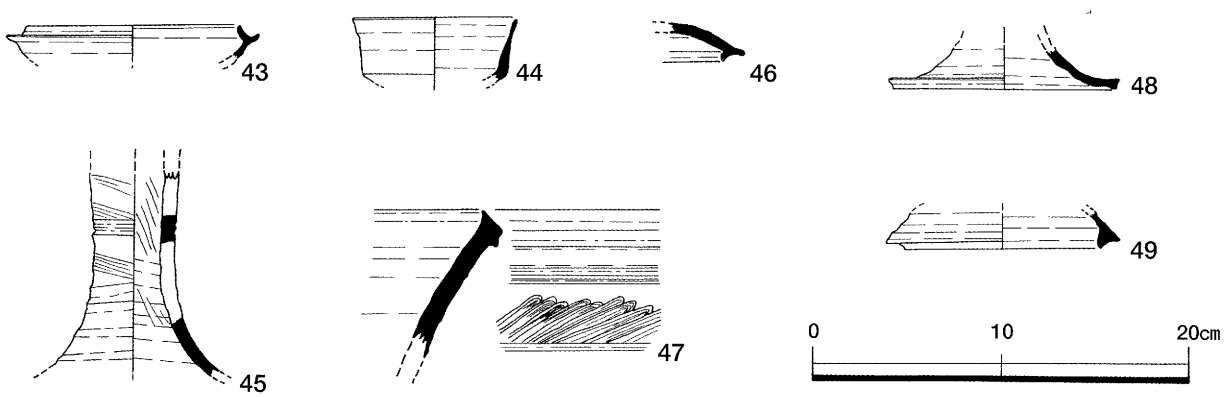


Fig.19　常心塚古墳外周溝出土遺物　S＝1/4

第Ⅳ章　地下式横穴墓出土の人骨

常心原地下式横穴墓群　5・6号地下式横穴墓出土人骨

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ

竹　中　正　巳

はじめに

2002年8月宮崎県西都市常心原地下式横穴墓群5・6号地下式横穴墓が発掘調査され、5号墓から2体、6号墓から3体の合計5体の人骨が出土した。人骨の保存状態はいずれも良く、特に6号墓は最終埋葬後に再び玄室を開け、集骨を行っている。宮崎平野部の古墳時代人の形質・文化・風習を考える上で大変貴重な資料である。本稿では、人骨の出土状況、人骨の観察・計測の結果を報告する。

人骨の出土状況

5号地下式横穴墓

2体が、南頭位の伸展位で、埋葬されていた。右側壁に近い人骨を1号人骨、玄室中央よりの人骨を2号人骨と呼ぶ。2体とも、ほぼ全身の骨格が残っており、保存状態はよい。1号人骨は女性・熟年、2号人骨は男性・壮年と判定した。

いずれも、赤色顔料が、頭部から頸部、肋骨にかけて付着している。頭蓋の赤色顔料は前頭部の髪の生え際にあたる部分から顔面にかけて付着しており、脳頭蓋の大部分には付着していない。また、玄室の南側の壁には、指でつけたような赤色顔料の跡が2個所残っていた。残っている場所は、1号人骨の頭上である。そして、1号人骨の足先の西側には坏の中に赤色顔料が遺存していた。これらの状況を考え合わせると、玄室の外で赤色顔料が遺体に塗られるか、ふりかけられ、玄室内に遺体が運び込まれたわけではなく、赤色顔料は坏にいれて玄室に持ち込まれ、遺体を安置した後に手を使って顔面に塗られたという状況が想定できる。

また、1号人骨の左眼窩の下縁部に植物質が付着している。この植物質の表面（上面）には、赤色顔料は認められない。植物質が付着している部分は、屍床の石に接触していた部分である。1号人骨の頭蓋は、軟組織の融解過程中か、白骨化した後、現在の位置に動いているが、この植物質は赤色顔料を塗布後に遺体を覆った樹皮であるのかもしれない。

6号地下式横穴墓

玄室の中央部に集骨された人骨の山が3つ遺存している。3つの山は、奥壁から玄室の入り口の方向に一直線に並んでいる。3つの山の人骨は、それぞれ1体分の人骨がまとめられたものであり、他の人骨の混入はない。奥壁側から玄門側へ、集骨人骨を1号人骨、2号人骨、3号人骨と呼ぶ。3体とも四肢骨骨体部の保存状態はよい。頭蓋の保存状態は、1号、3号人骨で比較的よいが、2号人骨は悪い。1号人骨は女性・若年（15～16歳）、2号人骨は女性・壮年、3号人骨は男性・壮

年と判定した。

玄室内では、集骨された人骨の山のほかに、玄室入り口に近い場所に頭蓋片や赤色顔料が遺存している。その遺存状況から、集骨人骨列の東側に2体が、西側に1体が、いずれも南頭位で埋葬されていたと判断できる。東側の2体の内、集骨列に近い側の1体は、頭蓋片が残っており、蝶後頭軟骨結合部が確認できる。蝶後頭軟骨結合部は癒合しておらず、この人骨は未成人であることが分かる。集骨列の内、1号人骨は四肢骨の骨端が未癒合なことや歯が第2大臼歯までしか萌出していないことから、若年（15～16歳）と判定される。1号人骨の頭蓋は、蝶後頭軟骨結合部を含む後頭部から頭蓋底の部分が遺存していないことから、1号人骨は蝶後頭軟骨結合が未癒合である後頭骨片と同一個体である。

集骨列中の1号人骨が元々この玄室内に埋葬されていたと判断できるので、他の2号、3号人骨も、元々、6号墓の玄室内に埋葬されていたものが集骨されたと考えるのが妥当である。2号人骨は遺存している頭蓋片が左右側頭骨の錐体部と歯だけであることもあり、赤色顔料は確認できなかったが、3号人骨の前頭部には赤色顔料が確認できた。玄室の右側壁に埋葬されていた遺体の頭部に相当する部分には多量の赤色顔料が遺存している。玄室の左側壁に近い位置に埋葬されていた遺体の頭部に相当する部分には若干の赤色顔料が遺存するだけである。3号人骨の前頭部の赤色顔料の付着範囲から、隣接する5号墓に葬られた2体の人骨と同様、赤色顔料は玄室内で埋葬時に塗布されたと推測できる。そして、2号人骨の頭蓋の遺存状況を考え合わせると、右側壁に近い位置に元々2号人骨が埋葬されていて、集骨された時には赤色顔料の付着した顔面部をはじめ頭蓋のほとんどは腐食していた。そのため、頭部のあった位置の敷石上に赤色顔料が多量に遺存したと考えられないだろうか。人骨や玄室内に残る赤色顔料の成分を分析し、この推論の裏付けが得られないか、更に検討を進めていく必要があるが、現時点では、玄室の東側から2号人骨、1号人骨が葬られ、左側壁に近いところに3号人骨が集骨前に埋葬されていたと考えるのが一番妥当のように思われる。その後、頭を南に向け伸展位で埋葬されていた人骨3体が完全に白骨化した後、玄室が再度開けられ、1体ごとに集骨され、1号、2号、3号人骨の山ができた。1号人骨の蝶後頭軟骨結合部を除き、埋葬原位置に人骨片が遺存していないことから、集骨は丁寧に行われたことがわかる。

人骨の観察・計測結果

人骨の観察・計測の結果を表1から表13に、6号墓に遺存する3体の人骨の遺存部位を図1から図3に示す。

計測できた5号墓1号人骨、5号墓2号人骨は、狭・高顔傾向を示す。特に眼窩や鼻部は著しい。顔面の平坦性は著しい。頭型は、中頭に属する。身長は、これまで出土した宮崎平野部の古墳時代人骨と比べ、男性（5号墓1号人骨）ではそれほど高くはないが、女性（5号墓2号人骨）では高い。脳頭蓋が計測できた6号墓3号人骨（男性・壮年）は、過短頭に属する。

その他に特記事項として、妊娠痕が5号墓1号人骨と6号墓2号人骨の寛骨に確認できた。また、6号墓3号人骨の仙骨に脊椎二分が認められた。さらに、6号墓3号人骨の下顎には第2乳臼歯が残存している。第2小臼歯の両側先天欠如と考えられる。

南九州の男性古墳時代人骨の研究から、山間部と宮崎平野部では形質に違いがあり、この地域の古墳人が3つのタイプに分けられることが指摘されている（松下，1990）。1）強い低・広顔傾向を示し、低身長で、西北九州人に近い「南九州山間部タイプ」、2）短頭型で、狭・高顔傾向を示し、高身長であり、北部九州弥生人に近い「宮崎平野部Ⅰタイプ」と3）狭・高顔ではあるが、中頭型で眼窩や鼻部の高径が低く、周辺にこれと類似する例を見出せない「宮崎平野部Ⅱタイプ」に

である。

今回、観察・計測できた人骨は松下が挙げた宮崎平野部ⅠタイプとⅡタイプの古墳時代人骨の特徴を合わせ持つ。宮崎平野部では、まだ、古墳時代人骨の出土数が少なく、男性人骨で指摘された2タイプの検証や、女性人骨の形質に不明な点が多い。今後、宮崎平野部の地下式横穴墓出土人骨の増加を待って、南九州地域の古墳時代人骨の再検討が行われることを期待したい。

Tab1. 脳頭蓋計測値(mm)及び示数

M No.	人骨番号	常心原5－1	常心原5－2	常心原6－3
	性別	女性	男性	男性
	年齢	熟年	壮年	壮年
1	頭蓋最大長	175	178	175
8	頭蓋最大幅	137	135	150
17	バジオン･ブレグマ高	132	134	129
3	グラベロラムダ長	170	173	173
5	頭蓋底長	101	102	101
9	最小前頭幅	95	85	99
10	最大前頭幅		115	124
11	両耳幅	125	126	143
12	最大後頭幅	107	108	115
13	乳突幅		106	
7	大後頭孔長	36	34	36
16	大後頭孔幅	29	30	32
23	頭蓋水平周	512	508	527
24	横弧長	312	308	323
25	正中矢状弧長	350	361	
26	正中矢状前頭弧長	115	121	
27	正中矢状頭頂弧長	120	122	133
28	正中矢状後頭弧長	115	118	110
29	正中矢状前頭弦長	106	109	105
30	正中矢状頭頂弦長	114	110	116
31	正中矢状後頭弦長	95	95	94
8/1	頭蓋長幅示数	78.3	75.8	85.7
17/1	頭蓋長高示数	75.4	75.2	73.7
17/8	頭蓋幅高示数	96.4	99.3	86.0
9/10	横前頭示数		73.9	79.8
9/8	横前頭頭頂示数	69.3	63.0	66.0
16/7	大後頭孔示数	80.6	88.2	88.9
1+8+17/3	頭蓋モズルス	148.0	149.0	151.3
26/25	前頭矢状弧示数	32.9	33.5	
27/25	頭頂矢状弧示数	34.3	33.8	
28/25	後頭矢状弧示数	32.9	32.7	
27/26	矢状前頭頭頂示数	104.3	100.8	
28/26	矢状前頭後頭示数	100.0	97.5	
28/27	矢状頭頂後頭示数	95.8	96.7	82.7
29/26	矢状前頭示数	92.2	90.1	
30/27	矢状頭頂示数	95.0	90.2	87.2
31/28	矢状後頭示数	82.6	80.5	85.5

Tab2. 顔面頭蓋計測値(mm)及び示数

M No.	人骨番号	常心原5－1	常心原5－2
	性別	女性	男性
	年齢	熟年	壮年
40	顔長	101	98
45	頬骨弓幅	((142))	142
46	中顔幅	101	104
47	顔高	116	119
48	上顔高	74	72
51	眼窩幅(左)	40	40
	眼窩幅(右)	39	42
52	眼窩高(左)	33	34
	眼窩高(右)	34	38
54	鼻幅	25	23
55	鼻高	52	50
H.	NLH鼻高		
43	上顔幅		97
44	両眼窩間幅	100	100
50	前眼窩間幅	21	18
F.	鼻根横弧長	23	20
57	鼻骨最小幅	7	8
60	上顎歯槽長	54	54
61	上顎歯槽幅	63	67
62	口蓋長	47	47
63	口蓋幅	43	44
64	口蓋高	15	13
72	全側面角	78	67
73	鼻側面角	84	74
74	歯槽側面角	68	60
47/45	Kollmann顔示数	((81.7))	83.8
47/46	Virchow顔示数	114.9	114.4
48/45	Kollmann上顔示数	((52.1))	50.7
48/46	Virchow上顔示数	73.3	69.2
52/51	眼窩示数(左)	82.5	85.0
	眼窩示数(右)	87.2	90.5
54/55	鼻示数	48.1	46.0
40+45+47/3	顔面モズルス	((119.7))	119.7
61/60	上顎歯槽示数	116.7	124.1
63/62	口蓋示数	91.5	93.6
64/63	口蓋高示数	34.9	29.5
40/5	顎示数	100.0	96.1
50/44	眼窩間示数	21.0	18.6
50/F.	鼻根湾曲示数	91.3	90.0
65	下顎関節突起幅	121	
65(1)	下顎筋突起幅	100	108
66	下顎角幅		106
69	オトガイ高	34	36
69(1)	下顎体高(左)		37
	下顎体高(右)		34
69(3)	下顎体厚(左)	15	14
	下顎体厚(右)		14
70a	下顎頭高(左)		65
	下顎頭高(右)		62
70	下顎枝高(左)		64
	下顎枝高(右)		65
71	下顎枝幅(左)		37
	下顎枝幅(右)		39
71a	最小下顎枝幅(左)		36
	最小下顎枝幅(右)		39
68	下顎(体)長		82
68(1)	下顎長	115	105
79	下顎枝角(左)		120
	下顎枝角(右)		106
71/70	下顎枝示数(左)		57.8
	下顎枝示数(右)		60.0

Tab3. 顔面平坦度計測値(mm)及び示数

人骨番号	常心原5－1	常心原5－2
性別	女性	男性
年齢	熟年	壮年
前頭骨弦	99.5	95.0
前頭骨垂線	12.5	12.8
前頭骨平坦示数	12.6	13.5
鼻骨弦	6.8	7.6
鼻骨垂線	1.5	2.3
鼻骨平坦示数	21.5	30.5
頬上顎骨弦	100.7	108.9
頬上顎骨垂線	20.3	20.8
頬上顎骨平坦示数	20.2	19.1

Tab4. 頭蓋形態小変異の出現状況

	人骨番号	常心原5－1		常心原5－2		常心原6－1		常心原6－3	
	性別	女性		男性		女性		男性	
	年齢	熟年		壮年		若年		壮年	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨		－		－				－
2	ラムダ縫合骨	－	－	－	－			＋	＋
3	インカ骨		－		－				－
4	横後頭縫合痕跡	－	－	－	－			－	－
5	アステリオン小骨	－	＋	＋	＋			－	－
6	後頭乳突縫合骨	－	＋	－	－			－	－
7	頭頂切痕骨	－	－	－	－			－	－
8	頭頂孔			－	－				
9	冠状縫合骨			－	－				
10	前頭縫合残存		－		－				－
11	眼窩上神経溝	－	－	－	－				
12	眼窩上孔	－	－	－	－	－		－	－
13	前頭孔	－	－	－	－	－	－	－	－
14	二分頬骨		－	－	＋				
15	横頬骨縫合痕跡		－	－	－				
16	頬骨顔面孔欠如			－	－				
17	口蓋隆起		－		＋		－		－
18	内側口蓋管骨橋	＋	＋	－	－	－	－	－	－
19	外側口蓋管骨橋	－	－	－	－				
20	歯槽口蓋管	－	－	－	－				
21	顆管欠如	＋	－	－	－			－	
22	後頭顆前結節	－	－	－	－			－	
23	第3後頭顆		－		－				－
24	後頭顆旁突起	－	－	－	－			－	
25	舌下神経管二分	－	－	－	－			＋	
26	頸静脈孔二分	－	－	－	－				
27	偏側頸静脈孔優位		－		R				
28	外耳道骨瘤	－	－	－	－	－		＋	－
29	フシュケ孔	－	－	－	－	－		－	－
30	ベサリウス孔	＋	－	－	＋			＋	－
31	卵円孔形成不全	－	－	－	－			－	－
32	棘孔開裂	－	－	－	－			－	－
33	翼棘孔	－	＋	－	－			－	－
34	床状突起間骨橋	－	－	－	－			－	－
35	左側横洞溝優位		－		R				R
36	副オトガイ孔		－	－	－				
37	下顎隆起	＋	＋	＋	＋	－		＋	＋
38	顎舌骨筋神経管	－	－	－	－	＋	－	－	

Tab5. 上腕骨計測値(mm)及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号		常心原 5－1	常心原 5－2	常心原 6－3
	性別		女性	男性	男性
	年齢		熟年	壮年	壮年
1	最大長	左	285	299	
		右	287	305	
2	全長	左	282	293	
		右	285	300	
5	中央最大径	左	21	21	
		右	21	23	
6	中央最小径	左	15	19	
		右	16	18	
7	骨体最小周	左	62	62	65
		右	60	65	68
7a	中央周	左	57	64	
		右	65	68	
6/5	骨体断面示数	左	71.4	90.5	
		右	76.2	78.3	
7/1	長厚示数	左	21.8	20.7	
		右	20.9	21.3	

Tab6. 橈骨計測値(mm)及び示数

橈骨 M No.	人骨番号		常心原 5－1	常心原 5－2	常心原 6－3
	性別		女性	男性	男性
	年齢		熟年	壮年	壮年
1	最大長	左		229	
		右			
2	機能長	左		217	
		右			
3	最小周	左	38	40	42
		右	37	36	
4	骨体横径	左	15	15	
		右		13	
5	骨体矢状径	左	10	11	
		右		11	
4a	骨体中央横径	左		13	
		右			
5a	骨体中央矢状径	左		11	
		右			
5(5)	骨体中央周	左		40	
		右			
3/2	長厚示数	左		18.4	
		右			
5/4	骨体断面示数	左	66.7	73.3	
		右		84.6	
5a/4a	中央断面示数	左		84.6	75.0
		右			72.2

Tab7. 尺骨計測値(mm)及び示数

尺骨 M No.	人骨番号		常心原 5－1	常心原 5－2
	性別		女性	男性
	年齢		熟年	壮年
1	最大長	左		248
		右		
2	機能長	左	205	220
		右		
3	最小周	左		36
		右		
3'	中央周	左	41	41
		右		
11	尺骨前後径	左	12	15
		右	14	
12	尺骨横径	左	13	15
		右	14	
11'	中央最小径	左	11	13
		右		
12'	中央最大径	左	14	14
		右		
3/2	長厚示数	左		21.8
		右		
11/12	骨体断面示数	左	92.3	100.0
		右	100.0	
11'/12'	骨体断面示数	左	78.6	92.9
		右		

Tab8. 大腿骨計測値(mm)及び示数

大腿骨 M No.	人骨番号		常心原 5－1	常心原 5－2	常心原 6－1	常心原 6－2	常心原 6－3
	性別		女性	男性	女性	女性	男性
	年齢		熟年	壮年	若年	壮年	壮年
1	最大長	左	394	420			
		右	395	424			
2	自然位全長	左	391	417			
		右	388	415			
6	骨体中央矢状径	左	26	30			
		右	27	30	23		
7	骨体中央横径	左	26	28			
		右	26	27	20		
8	骨体中央周	左	83	92			
		右	84	91	73		
9	骨体上横径	左	31	30		29	30
		右	30	31	23	27	28
10	骨体上矢状径	左	22	25		23	27
		右	23	26	23	24	27
8/2	長厚示数	左	21.2	22.1			
		右	21.6	21.9			
6/7	骨体中央断面示数	左	100.0	107.1			
		右	103.8	111.1	115.0		
10/9	上骨体断面示数	左	71.0	83.3		79.3	90.0
		右	76.7	83.9	100.0	88.9	96.4

Tab9. 脛骨計測値(mm)及び示数

脛骨 M No.	人骨番号		常心原 5−1	常心原 5−2	常心原 6−1	常心原 6−2	常心原 6−3
	性別		女性	男性	女性	女性	男性
	年齢		熟年	壮年	若年	壮年	壮年
1	全長	左	327	340			
		右	319	340			
1a	最大長	左	331	345			
		右	325	346			
8	中央最大径	左	26	35			
		右	26	34			
9	中央横径	左	20	21			
		右	20	21			
10	骨体周	左	74	90			
		右	73	89			
8a	栄養孔位最大径	左	33	40	27		36
		右	31	40	25	28	35
9a	栄養孔位横径	左	22	24	23		24
		右	21	24	23	19	24
10a	栄養孔位周	左	87	99	78		
		右	85	98	81	78	96
10b	骨体最小周	左	71	79	66	67	73
		右	71	81		70	78
9/8	中央断面示数	左	76.9	60.0			
		右	76.9	61.8			
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	66.7	60.0	85.2		66.7
		右	67.7	60.0	92.0	67.9	68.6
10b/1	長厚示数	左	21.7	23.2			
		右	22.3	23.8			

Tab10. 腓骨計測値(mm)及び示数

腓骨 M No.	人骨番号		常心原 5−1	常心原 5−2
	性別		女性	男性
	年齢		熟年	壮年
1	最大長	左	310	
		右		
2	中央最大径	左	13	
		右		15
3	中央最小径	左	10	
		右		13
4	中央周	左	37	
		右		46
4a	最小周	左		36
		右		35
3/2	骨体中央断面示数	左	76.9	
		右		86.7
4a/1	長厚示数	左		
		右		

Tab11. 鎖骨計測値(mm)及び示数

鎖骨 M No.	人骨番号		常心原 5−2
	性別		男性
	年齢		壮年
1	最大長	左	
		右	141
4	中央垂直径	左	
		右	12
5	中央矢状径	左	
		右	14
6	中央周	左	
		右	41
6/1	長厚示数	左	
		右	29.1
4/5	中央断面示数	左	
		右	85.7

Tab12. 身長(cm)

人骨番号		常心原 5−1	常心原 5−2
性別		女性	男性
年齢		熟年	壮年
身長(ピアソン式)	左	149.5	160.3
	右	149.7	161.0

Tab13. 四肢骨の最大長比と周径比(%)

人骨番号		常心原 5−1	常心原 5−2
性別		女性	男性
年齢		熟年	壮年
最大長の比	左		76.6
橈骨:上腕骨	右		
最大長の比	左	84.0	82.1
脛骨:大腿骨	右	82.3	81.6
最小周:中央周	左	74.7	67.9
上腕骨:大腿骨	右	71.4	66.7
中央周:骨体周	左	50.0	
腓骨:脛骨	右		51.7

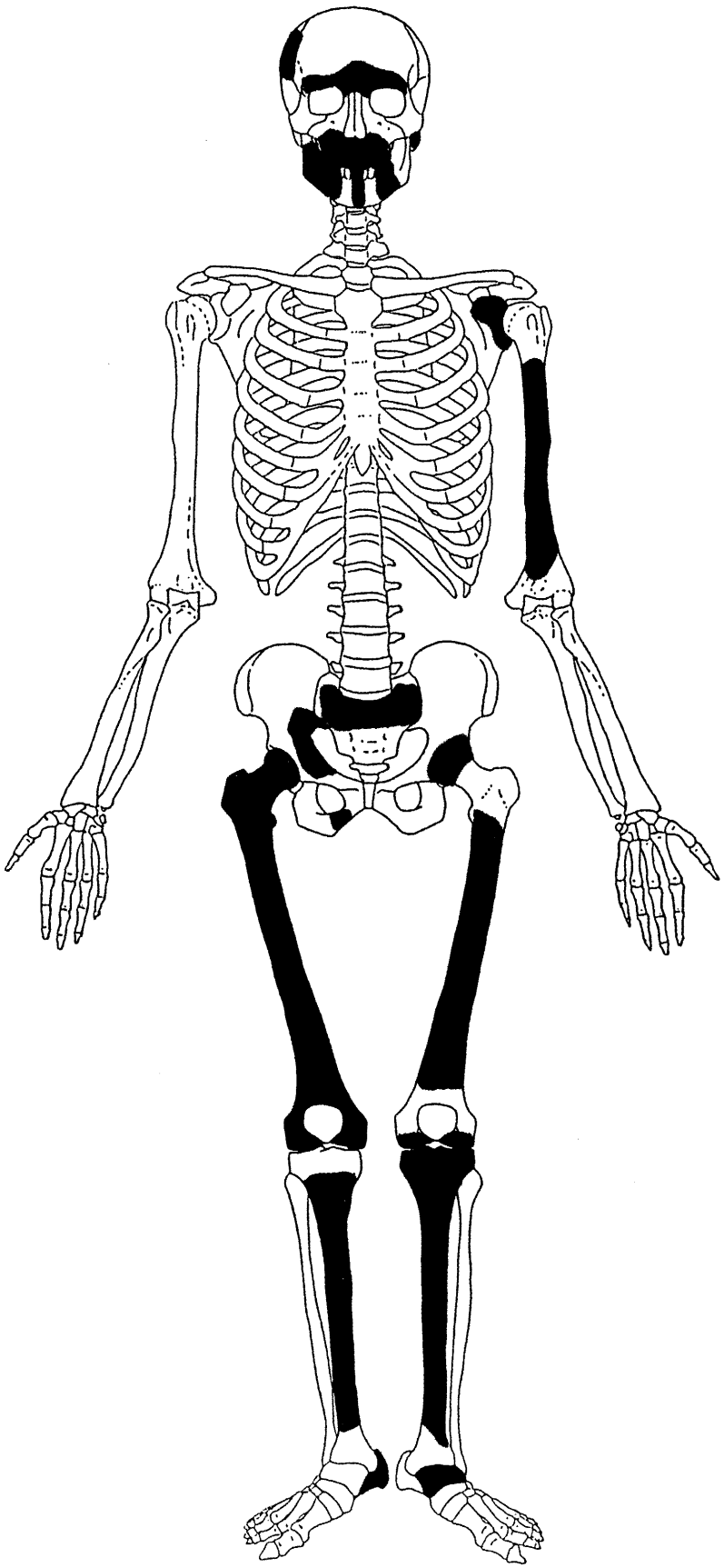


Fig.1　常心原 6 号地下式横穴墓 1 号人骨（女性・若年）の遺存部位

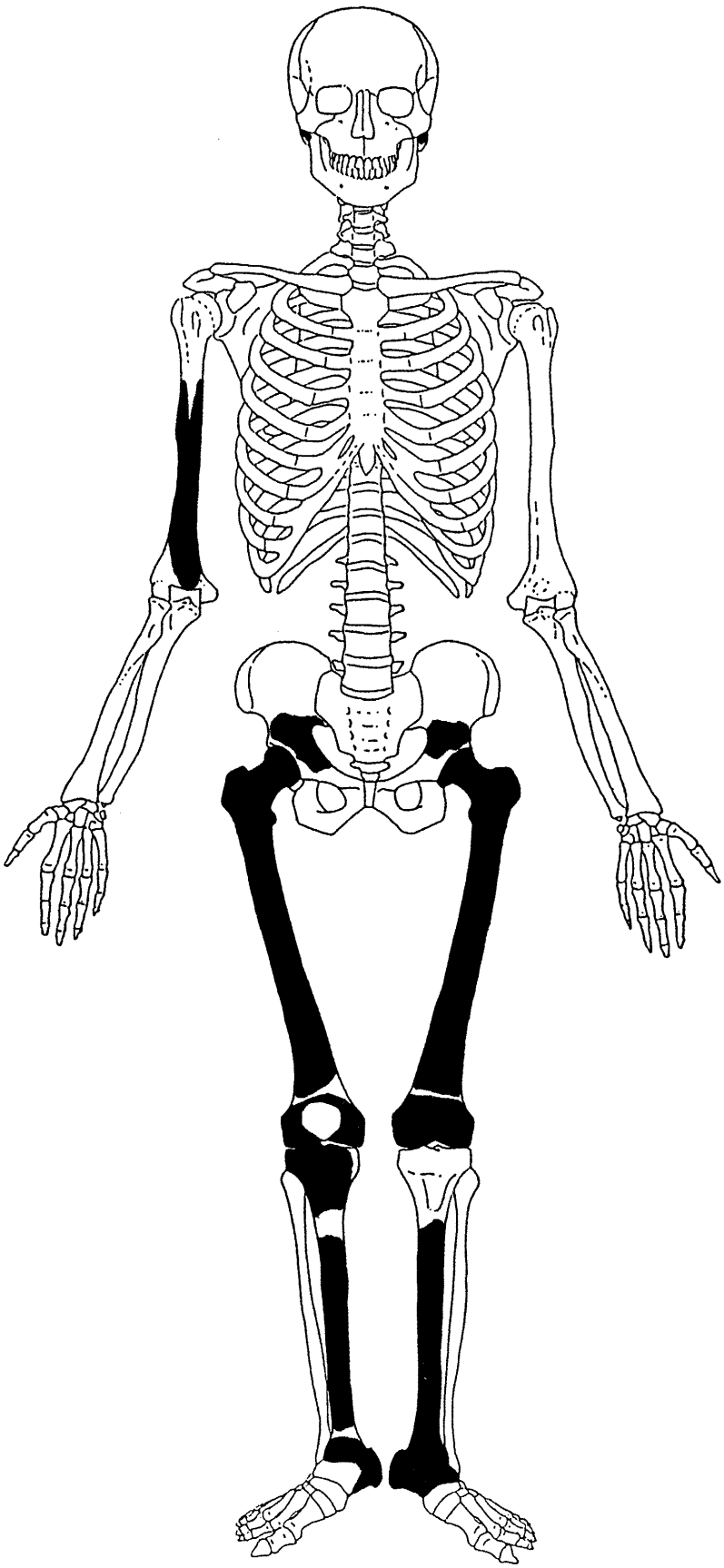


Fig.2　常心原 6 号地下式横穴墓 2 号人骨（女性・壮年）の遺存部位

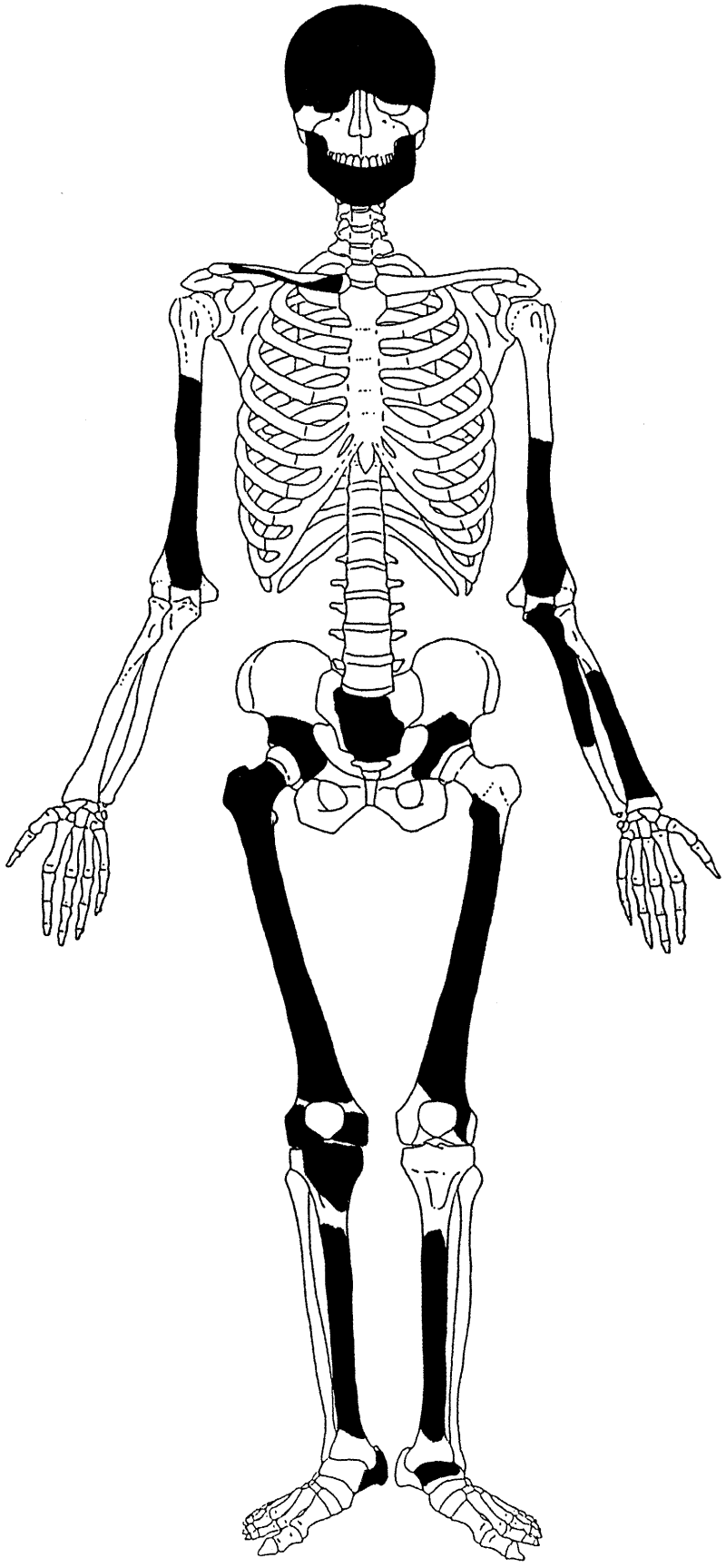
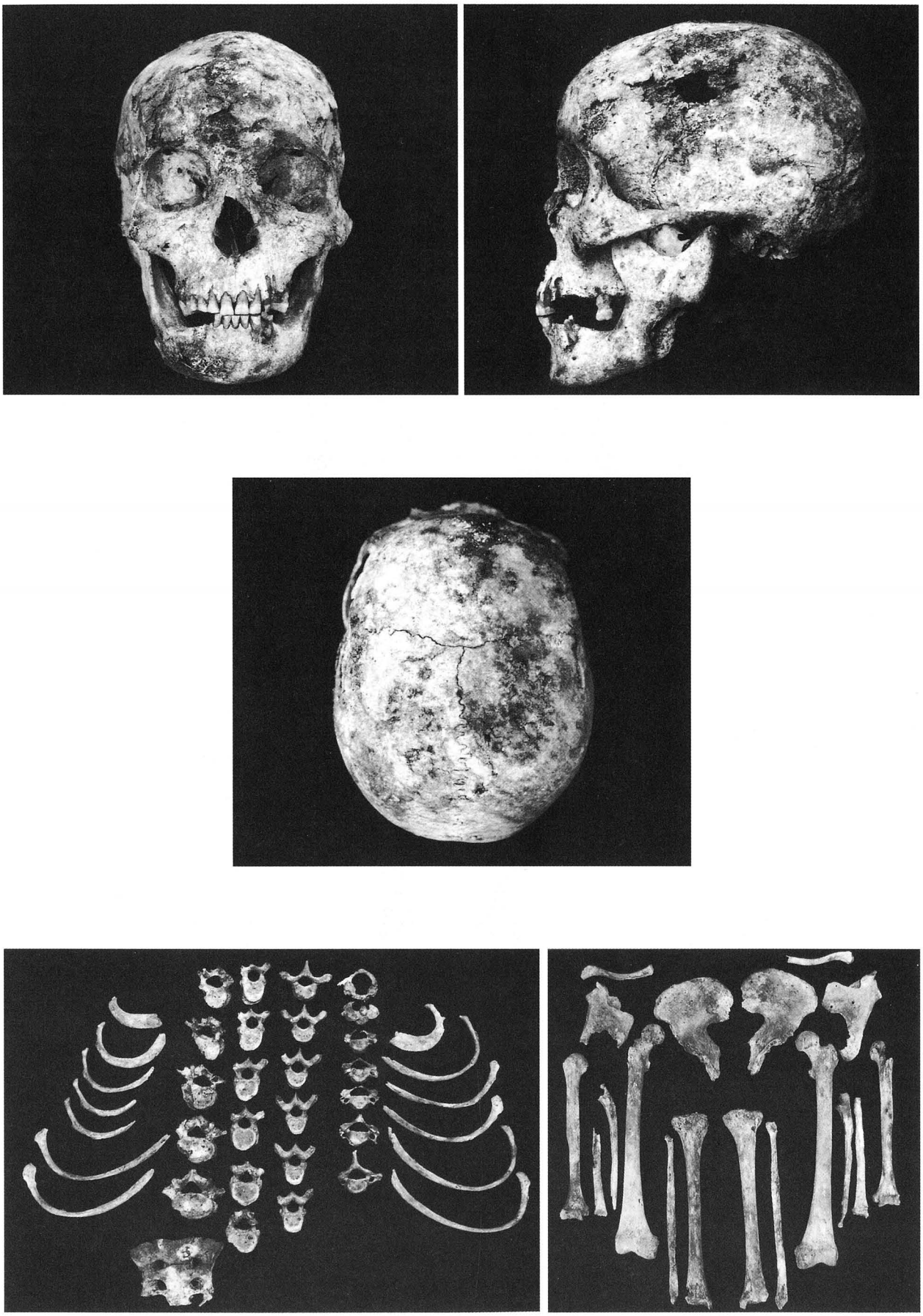
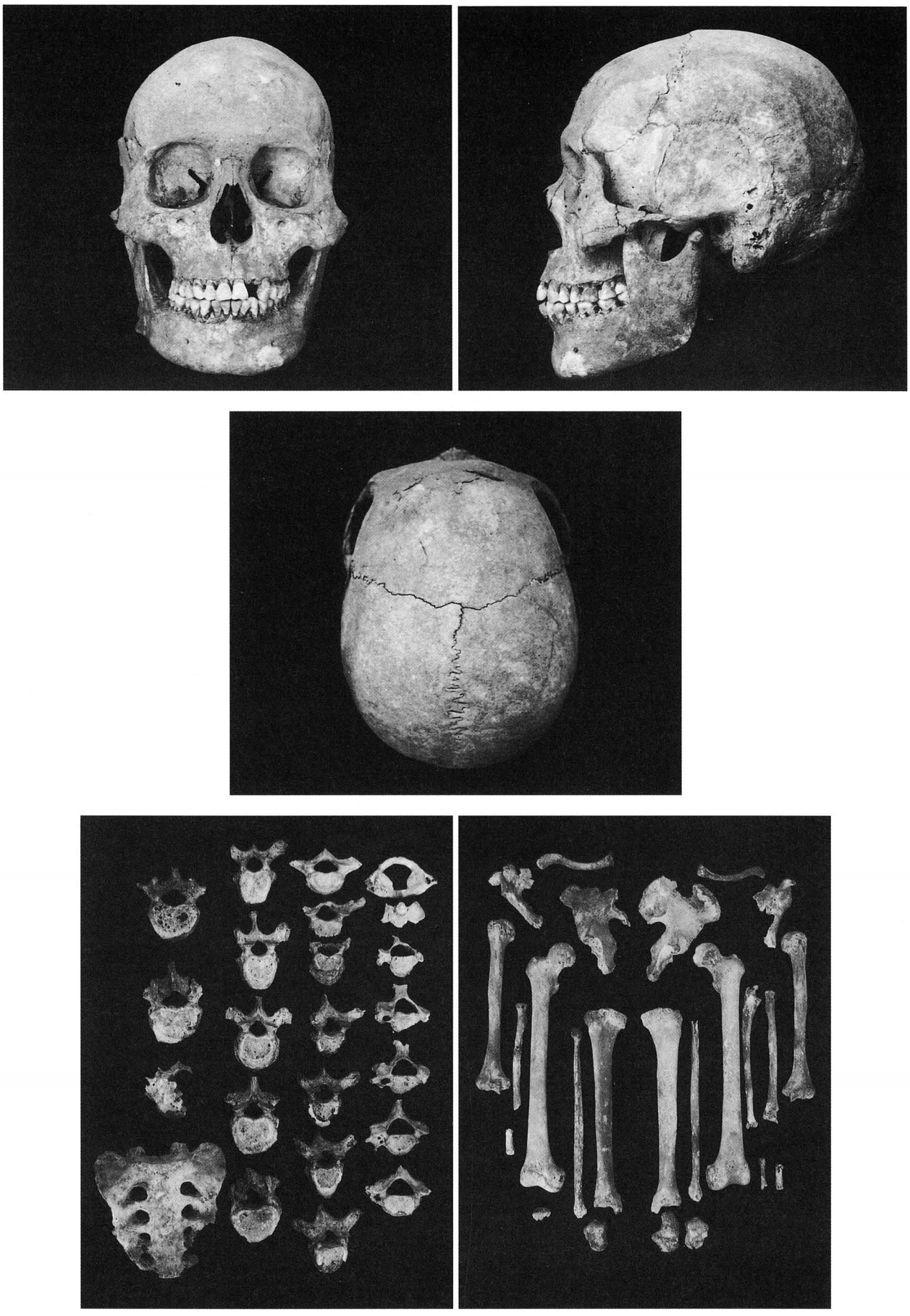


Fig.3　常心原 6 号地下式横穴墓 3 号人骨（男性・壮年）の遺存部位

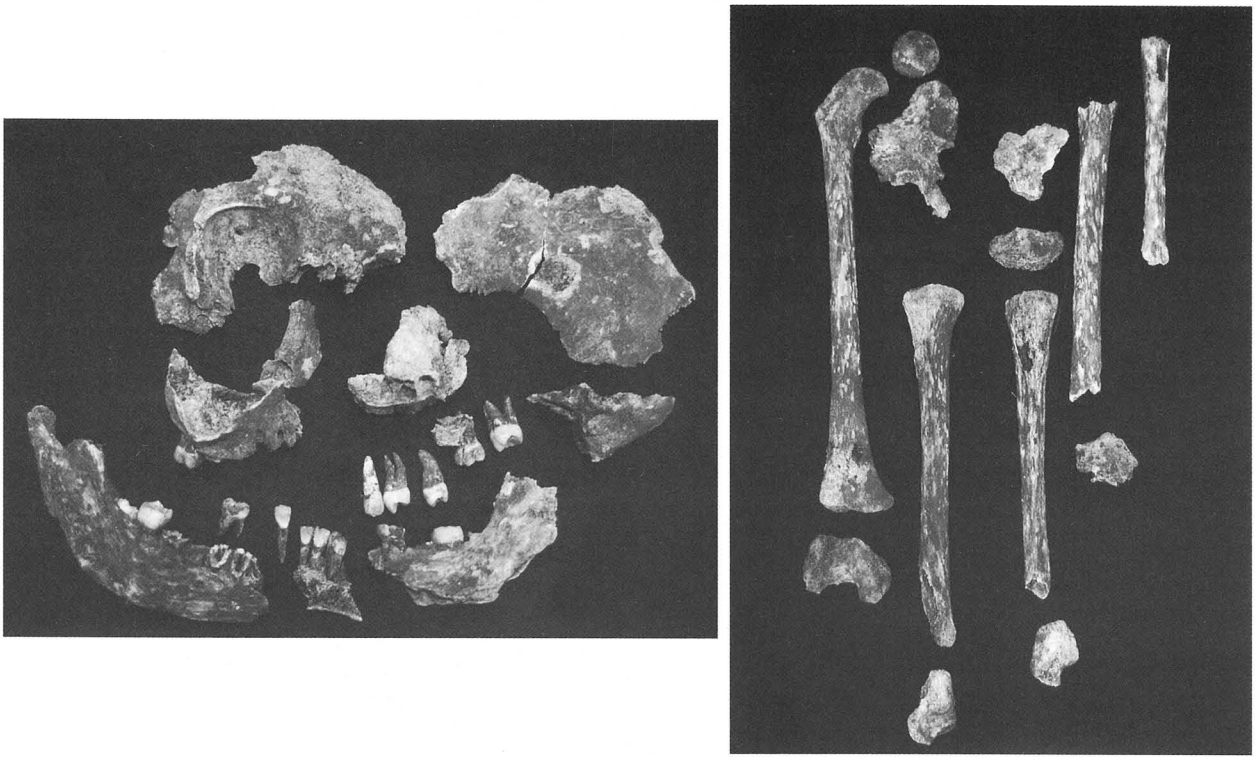


PL. 1　常心原 5 号地下式横穴墓 1 号人骨（女性・壮年）

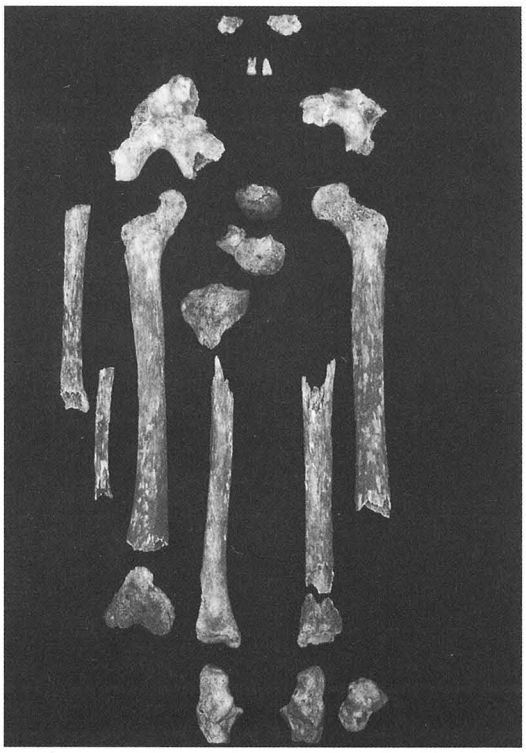
PL. 2　5号地下式横穴墓1号人骨の左眼窩下縁に付着の植物質



PL. 3　常心原 5 号地下式横穴墓 2 号人骨（男性・壮年）

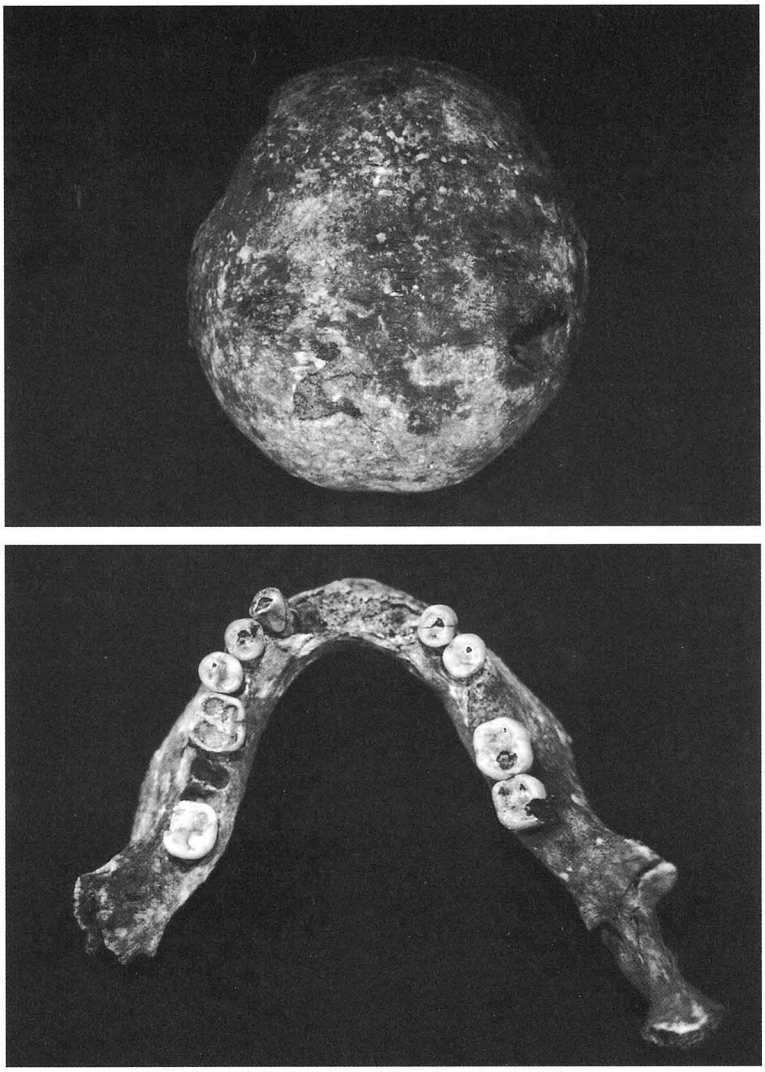


常心原 6 号地下式横穴墓 1 号人骨（女性・若年）



常心原 6 号地下式横穴墓 2 号人骨（女性・壮年）

PL. 4　①常心原 6 号地下式横穴墓 1 号人骨（女性・若年）
②常心原 6 号地下式横穴墓 2 号人骨（女性・壮年）



PL. 5　①常心原 6 号地下式横穴墓 3 号人骨（男性・壮年）

第Ⅴ章　まとめ

1．遺構の時期について

5号地下式横穴墓は、2体の埋葬を行い、それぞれに須恵器蓋坏を副葬する。これらの須恵器を陶邑窯跡群を中心とした編年と対比すると、その特徴はTK209型式の古段階に対応するもので、造営時期もその範囲で考えられる。竪坑埋土の状況からも最下層の5層を腐蝕土層と解釈し、内部の埋葬状況を考え合わせると、初葬後一定期間竪坑を埋めず2体目を埋葬した後、一度に埋めて以後使用しなかった短い造営期間が推定できる。

6号地下式横穴墓は、3体分の人骨が集骨されており、その脇に須恵器蓋坏が8つ並べて副葬されていた。その特徴はTK43型式からTK209型式の新段階に対応するものである。造墓時期の前後関係は6号地下式→5号地下式の順であるが、埋葬状況から考えても墓の使用期間は6号地下式の方が長い。玄室の構造も6号地下式は粗雑ではあるが、寄せ棟形天井で隅角がはっきりした平面形をなすのに対して、5号地下式はドーム形天井で隅角がはっきりしない平面形を呈し、この時期に玄室構造の変化を認めることができる。

常心塚古墳の外周溝から出土した須恵器はTK209型式の新段階からTK217型式に対応する特徴をもつ。あくまで外周溝へ流れ込んだ遺物であり、周辺地域ではこの時期、周溝内に地下式横穴墓が築造される事例（西都市堂ヶ嶋第2遺跡等）が発見されており、即座に常心塚古墳の年代を表す資料とは言い難いが一端を示すものであろう。

参考文献　田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

2．竪坑土層断面の比較

5号地下式横穴墓と6号地下式横穴墓の竪坑土層断面を比べると、両地下式に共通するのは5号地下式の4層や6号地下式の1層に見られるような更に細分することのできない大きな単位の層が埋土の主体を占める事である。このような層は、竪坑に次第に土砂が堆積して形成されたものではなく、人為的に一度に竪坑を埋めたため形成されたものと解釈する。

両地下式で異なるのは、埋土を構成する土質である。5号地下式は層中の半分以上が地山のブロック塊で構成されており、混じるブロック塊も大型のものが多い。6号地下式は特に1層が黒褐色土を主体に細かい地山ブロック塊が混じるもので、全体的にブロック塊の割合が少ない埋土である。この2相を玄室内の埋葬回数と考え合わせると、5号地下式は竪坑、玄室掘削時の廃土をそのまま竪坑埋土として利用したものと推測でき、6号地下式は追葬、集骨作業の過程で、一旦埋めた竪坑を数回掘り返した為、埋土中の地山ブロック塊が撹拌され形成したと推測できる。この違いは墓の使用状況（竪坑掘削回数）を反映したものと考える。

3．5号、6号地下式横穴墓の構築法

特に掘削と基本層序との関係について注目した。5号、6号ともほぼ同じ様相を持つ。まず、竪坑の掘削は、足場を確保し、掘削角度を変えながら段階的に掘り進む。基本層序のⅦ層（明黄褐色土・軟質）まで一旦掘り抜き、玄室掘削に必要な作業スペースを確保する。羨門は硬質のⅢ層（黒褐色土層）、Ⅳ層（褐色土層）、Ⅴ層（小林軽石層）を避け、軟質のⅥ層（暗褐色土層）、Ⅶ（明黄褐色土層）から横穴を掘りこみ、玄室は硬質のⅣ層を天井に利用する。そのため非常に強度があり、側溝敷設工事に掘削を受けていたが、全く崩落していなかった。天井の厚みは遺構検出面から5号で約70cm、6号で約60～120cmである。

埋葬時には、玄室掘削時の廃土を用いて作業スペースとして確保していた床を嵩上げし、その面で閉塞を行う。

土層の特徴を熟知し、巧みに利用して地下式横穴墓を構築したと推測され、玄室の掘削と土層との関係は構築法の一側面と考える。

4．玄室内の空間使用と集骨について

埋葬時における玄室空間の使用状況と集骨行為をまとめる。5号地下式横穴墓は玄室中心より右側壁側を広く取り、埋葬スペースとして使用していた。頭位を前壁側に向け2体が伸展位で埋葬され、左側壁側は空きスペースとなり屍床などの施設はない。埋葬時の遺体搬入などの作業を想定すると、まず玄室内に1人が入り外側から搬入される遺体を受け、引き入れる。右側壁側に設けてある屍床に寝かせ、玄室中央から左側壁にかけては作業、葬儀の場として使われたと考える。同じ要領で2体目を埋葬し、5号地下式の使用は終わる。そのため、左側のスペースは空いた状態で残ったと推測できる。

6号地下式では玄室中央に集骨が行われていた。第Ⅳ章の竹中氏の分析によると、3つの集骨の山は3体分の人骨と認められた。玄室内には集骨された人骨のほかに前壁側に頭蓋骨片や赤色顔料が遺存しており、また5号地下式同様、枕状に大型の石が配されていた。5号地下式と異なるのは左側壁側の使用状況で、6号地下式では礫が敷き詰められて埋葬スペースとして使用されていた可能性が高い。やはり枕状の大型の石が前壁側に配されており、6号地下式は右側壁側に2体、左側壁側に1体が埋葬されていた事が判断できる。

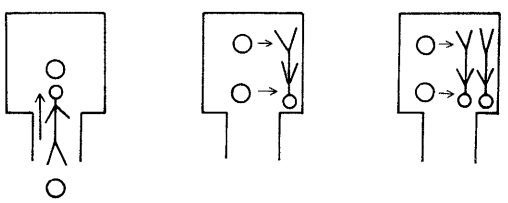
第Ⅳ章で人骨の分析から、1号人骨は、玄室内に残された人骨片（401）と同一固体であることから玄室内に元々埋葬されていたものと判断されたので、他の2号人骨、3号人骨も玄室内に埋葬されていたものが集骨された可能性が高い。3体が埋葬された後、白骨化した段階でもう一度玄室が開けられ、集骨が行われたと推測でき、竪坑土層断面からも4つの下降面が認められ、それらを追葬時、集骨時における竪坑の掘削で形成されたものと考えれば4回の開口を推定できる。

玄室内の使用状況を5号地下式の例と比較して推測すると、やはり埋葬時に遺体搬入作業のため1人が玄室中央にまず入り、側壁側に埋葬したと考えられるが、その際の作業等のスペースは玄室中央に限られる。そう考えると3体の埋葬後、作業のため空きスペースとなっていた玄室中央部に集骨がなされていること、須恵器を伴わせていること、3体以後追葬の痕跡がないことから、6号地下式の集骨は埋葬スペース確保のための「片付け」とは区別し、葬送儀礼の1つとして考えるのが妥当である。

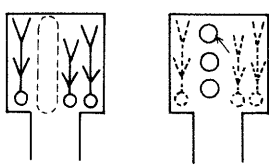
このような集骨は地下式横穴墓で確認されたのは初の事例である。横穴墓からは東北や山陰地方などで改葬との関係で事例が報告されている。池上悟1998年「山陰横穴墓の埋葬様式」『多知波奈考古』第4号によると、横穴墓の埋葬様式をA類：先葬者の遺骨を追葬時に順次片付け集骨するもの、B類：先葬者の遺骨を追葬時に片付け、これを小型の改埋葬施設に収納する埋葬様式、C類：特定の横穴墓を改葬用に使用するもので、遺体を骨化する第1次埋葬施設を土壙墓などとするC1類と横穴墓とするC2類、に区分する。

横穴墓では改葬に関連して集骨が行われる事例が多くあり、今回地下式横穴墓においても集骨が確認されたため今後宮崎平野部の古墳時代の葬送儀礼を考えていく際にも注目していかなくてはならない視点である。

以上、調査成果をまとめてきたが、調査年度内での報告であったため不十分な点が多く、今後更に検討を重ねていく必要がある。



5号地下式玄室空間利用模式図



6号地下式玄室空間利用模式図

図　　版
(PLATES)

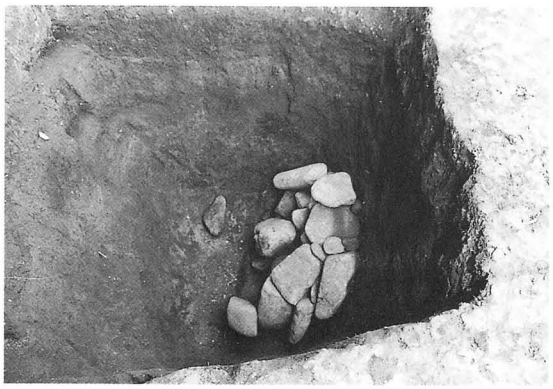
①常心塚古墳北側より調査区全景

②８号支線（真上から）

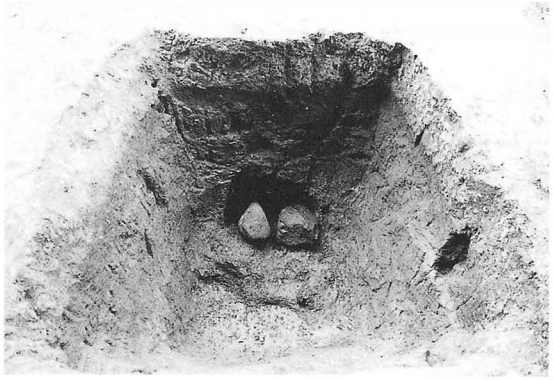
①常心原 5 号地下式横穴墓玄室内人骨

②5 号地下式竪坑土層断面

③5 号地下式閉塞石

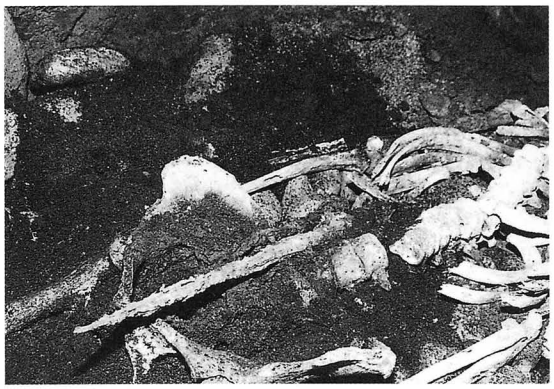


④5 号地下式閉塞状況



⑤5 号地下式 5 層下面

①５号地下式１号人骨



②１号人骨副葬直刀

③１号人骨副葬鉄鏃

④５号地下式２号人骨

⑤２号人骨副葬刀子

⑥須恵器副葬状況

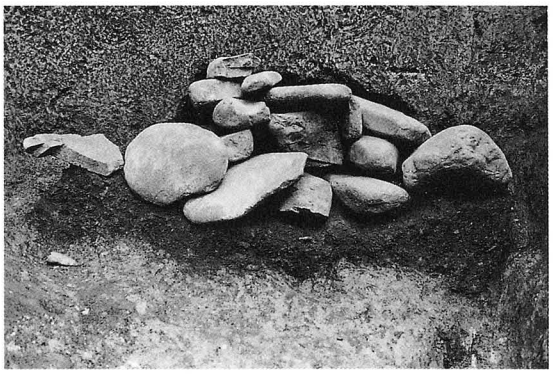
⑦５号地下式羨門掘削層と基本土層

⑧５号地下式竪坑降り口側

①6号地下式玄室内集骨状況

②6号地下式竪坑土層断面

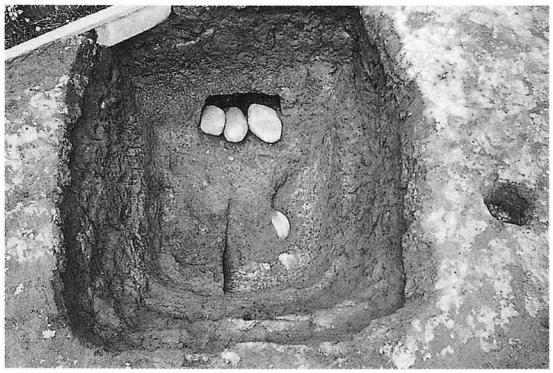
③6号地下式3層上面



④閉塞施設

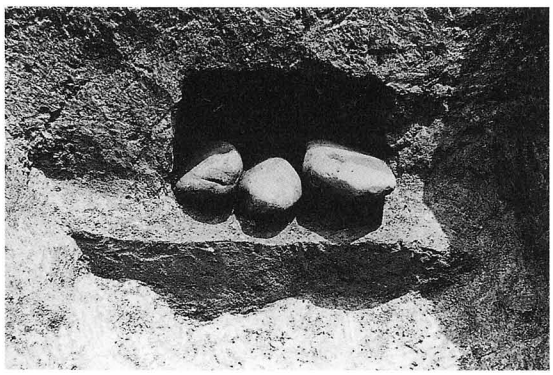
⑤閉塞施設(西から)

⑥4層上面検出状況

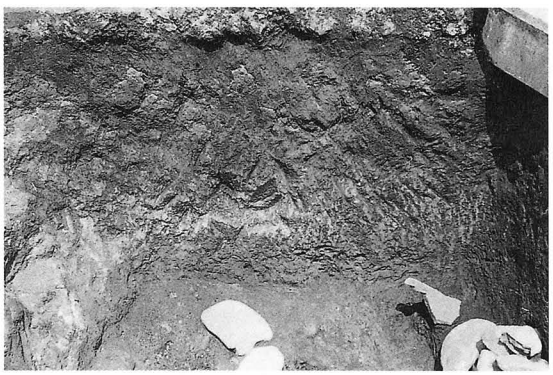


①５層上面検出状況

②５層下面検出状況



③閉塞面と５層下面



④竪坑掘削痕

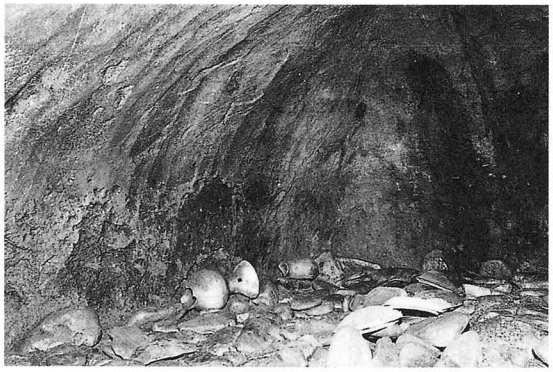
⑥集骨状況（羨門から）

⑤竪坑掘削痕

⑦１号集骨、２号集骨

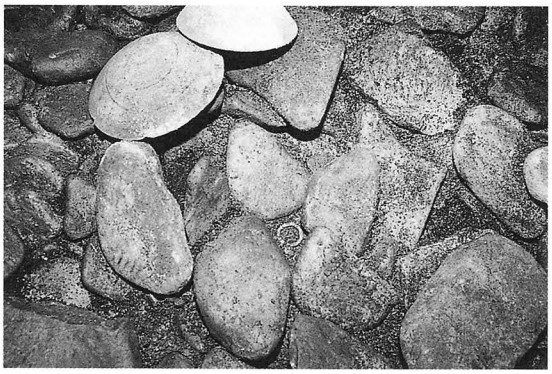
⑧３号集骨（手前）

PL. 6



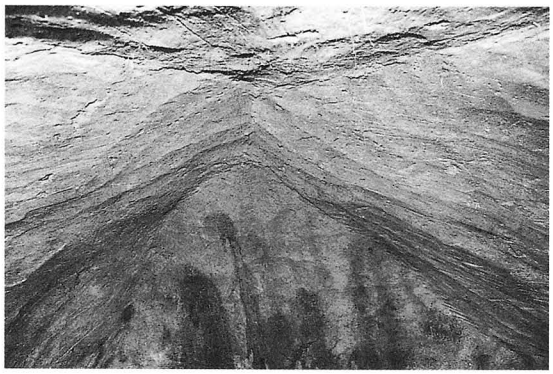
①6号地下式遺物出土状況

②鉄器出土状況

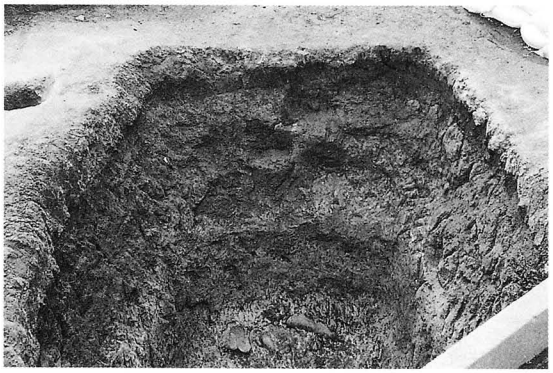


③耳環出土状況

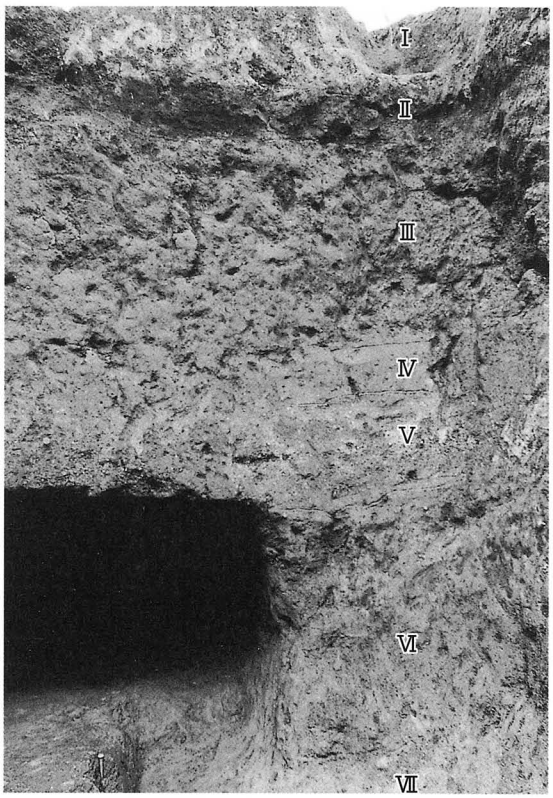
④前壁右隅推定頭位



⑤6号地下式玄室天井(羨門から)



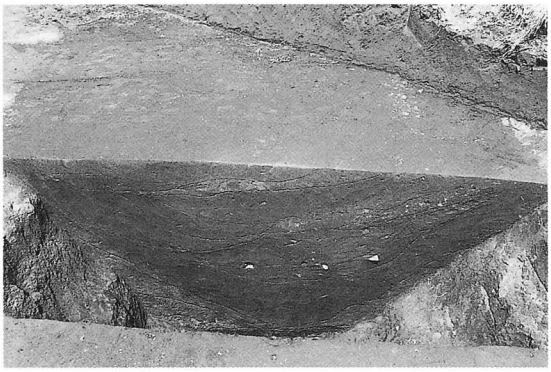
⑦6号地下式降り口側



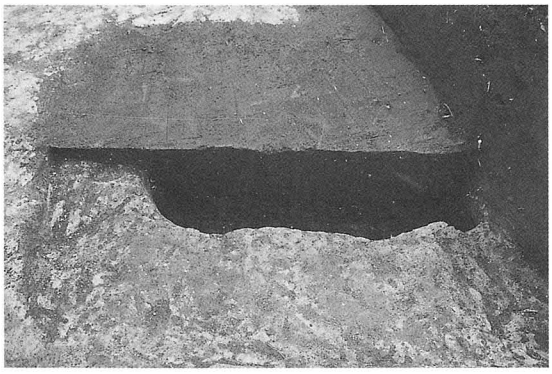
⑥6号地下式羨門掘削と基本土層

①常心塚古墳（真上から）

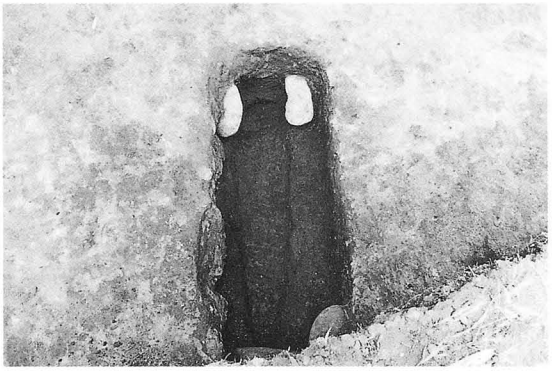
②常心塚古墳外周溝検出状況



③外周溝土層断面



④1号土壙墓



⑤2号土壙墓

⑥3号土壙墓

⑦4号土壙墓

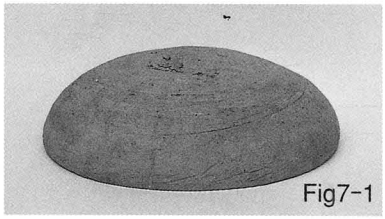


Fig7-1

Fig7-2

Fig7-3

Fig7-4

Fig7-5

5 号地下式出土須恵器

Fig14-17

Fig14-18

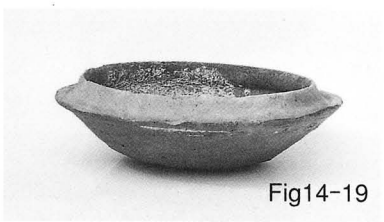


Fig14-19

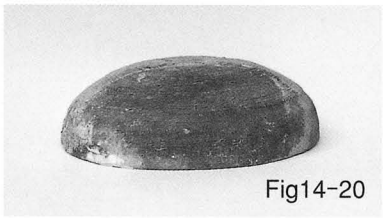


Fig14-20

Fig14-21

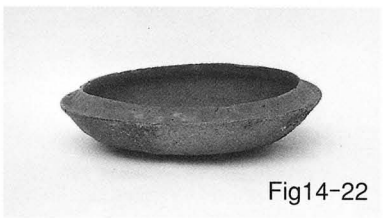


Fig14-22

Fig14-23

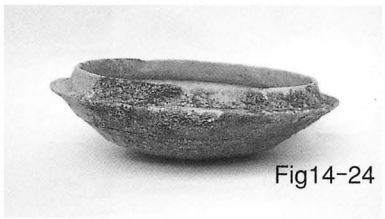


Fig14-24

Fig14-25

Fig14-26

6 号地下式出土須恵器

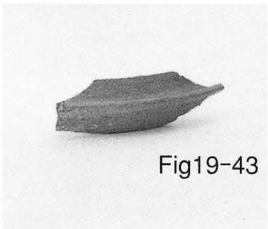


Fig19-43

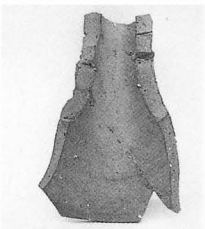


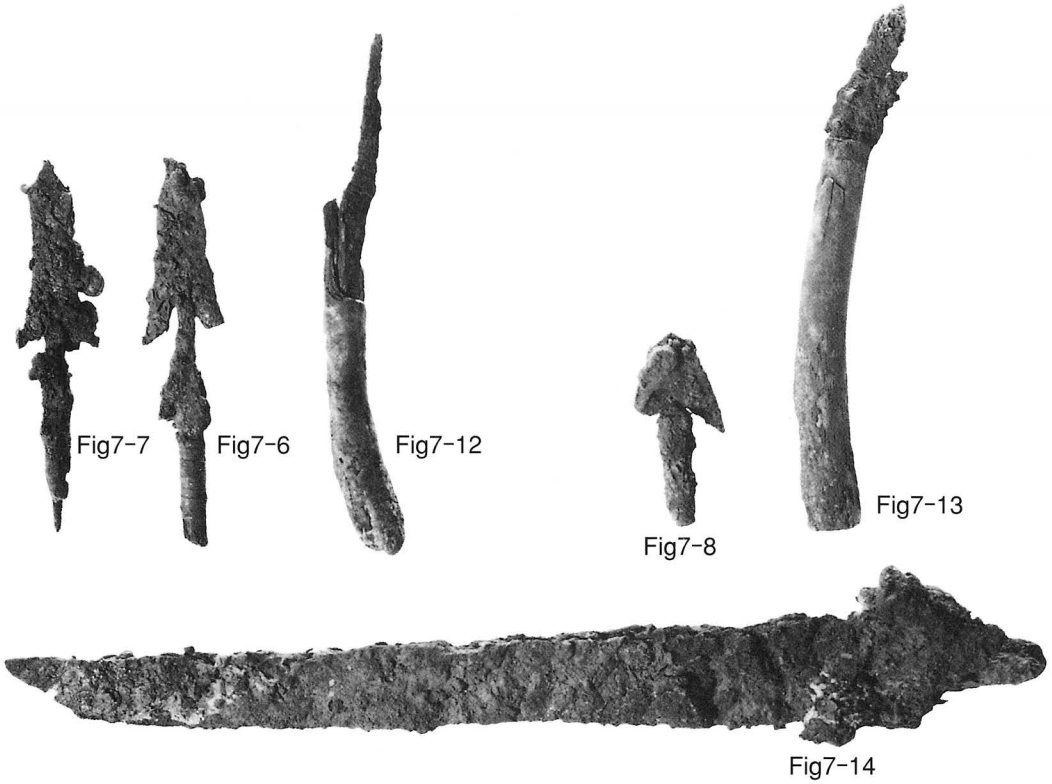
Fig19-45

Fig19-47

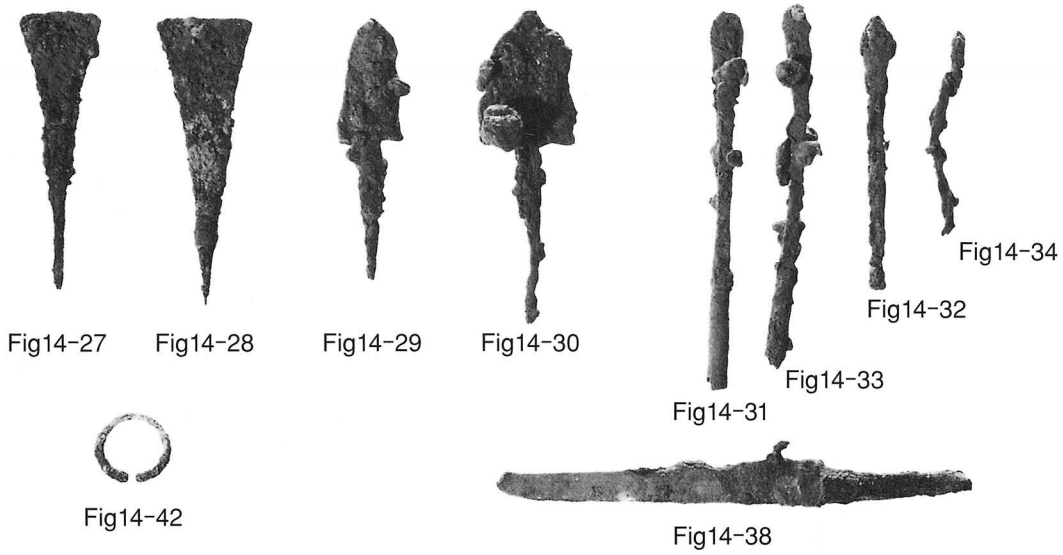
Fig19-49

常心塚古墳外周溝出土須恵器片

PL. 8　5 号地下式・6 号地下式・常心塚古墳出土遺物



5 号地下式出土鉄器



6 号地下式出土鉄器

PL. 9　5 号地下式・6 号地下式出土鉄器

報告書抄録

ふりがな	とばるいせきぐん
書名	外原遺跡群
副書名	県営一般農道整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第34集
編集者名	津曲大祐
編集機関	西都市教育委員会
所在地	〒881-8501　宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地　TEL.0983－43－1111
発行年月日	西暦　2003年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	
外原遺跡群 （とばるいせきぐん）	宮崎県西都市大字 （みやざきけんさいとしおおあざ） 上三財字常心原（かみさんざいあざじょうしんばる）　他		X＝－102700 ～ X＝－103600	Y＝32000 ～ Y＝30700	20020422 ～ 20021212	

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県営一般農道整備事業に伴う調査	古墳	古墳	古墳周溝 地下式横穴墓 土壙墓	須恵器 鉄鏃	地下式横穴墓で集骨の事例

調査面積	試掘調査	本発掘調査
平成12年度	3876.1㎡	
平成13年度	2094㎡	
平成14年度	3224㎡	4907.9㎡

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集』

「外 原 遺 跡 群」

平成15年3月28日発行

編集発行　西都市教育委員会

印 刷 所　イマイ印刷